

# 『朱子語類』訓門人訳注（五）

——卷一一七・45条～卷一一八・14条——

## 『朱子語類』訓門人研究会

本稿は、二〇〇七年秋に発足した『朱子語類』訓門人研究会の二〇一一年の成果である。本研究会は、『朱子語類』訓門人（巻一～三・巻一二）の全訳を目指して、隔週で活動を続けている。（会の発足の経緯に關しては本誌第一六号参照。）

本稿の作成は、参加者が順番に訳注原稿を作成し、それを共同で検討した後修正を加え、さらに最終的に訳文の統一をはかるために垣内が加筆・修正をした。訳注原稿の担当者は、各箇所の最後にその氏名を記した。

（垣内 景子）

今年度の研究会の参加者は以下の通りである。

宮下和大（麗澤大学モラロジー研究所専任研究員）・阿部光磨（早稲田大学講師）・松野敏之（國士館大学専任講師）・中嶋諒（早稲田大学講師）・小池直（早稲田大学大学院博士後期課程）・原信太郎

アレシャンドレ（早稲田大学大学院博士後期課程）・梶田祥嗣（早稲田大学大学院博士後期課程）・  
佐々木仁美（成立学園中学高等学校教諭）・江波戸瓦（早稲田大学大学院博士後期課程）・許家晟（早  
稲田大学大学院博士後期課程）

#### 凡例

※底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』を用いたが、標点等は適宜改めた部分もある。

※校注は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

・『朝鮮古写 徽州本朱子語類』（中文出版社） … 楠本本

・『朝鮮整版 朱子語類』（中文出版社） … 朝鮮整版

・『朱子語類』（正中書局） … 正中書局本

・『朱子語類大全』（和刻本・中文出版社） … 和刻本

なお、次の字の異同については、一々注記しなかった。

「著」 ⇄ 「着」 「箇」 ⇄ 「个」 「辨」 ⇄ 「辯」 「它」 ⇄ 「他」 「于」 ⇄ 「於」

「邊」 ⇄ 「邊」 ⇄ 「辺」

また、以上の四本において底本とは異なる巻に収録されている場合、巻数と共にページ数を明示した。

※原文・訳文中の「　　」は小字注部分である。

※注で用いた略称は以下の通り。

・『語類』：『朱子語類』　なお、『語類』からの引用は、卷数と条数のみを記した（括弧内の頁数は底本のもの）。

- ・『遺書』：『河南程氏遺書』（中華書局・理学叢書『二程集』）（括弧内の頁数は上記のもの。）
- ・『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台灣學生書局）
- ・『資料索引』：『宋人伝記資料索引』（中華書局）
- ・『学案』：『宋元学案』（中華書局）
- ・『考文解義』：『朱子語類考文解義』（李宜哲、民族文化文庫）

## 卷一一七　朱子十四　訓門人五

※引き続き陳淳への訓戒。

【一一七・45】

先生は我々門人たちを寝所にお呼びになつて、おっしゃつた。

朱子「安卿（陳淳）には、もっと話したいことがあるのではないかね。」

(陳) 淳「二二数日、学問の道理について思索をめぐらしてみました。日常の中の学問修養が、一步一步緻密にしていかなければならないのは、天理は日常の中にあまねく行き渡り、その端緒は千条万緒、あらゆるところにあるので、欠けたところがあつてはならないからです。もし学問修養に欠けるところがあれば、天理において網羅できません。」

朱子「それはそうだ。理は日常の物事の中にしかないし、学問修養は緻密でなければならない。しかし、粗っぽいところは緻密にしていかなくてはならないと同時に、緻密なところはむしろのびやかに押し広げていかなければならない。もし緻密さを求めることに拘るばかりでは、逆にせせこましくなってしまう。」

淳「のびやかに押し広げた境地とはどのようなものなのでしょうか。」

朱子「それもやはり、天理はこう人欲はこうということが分かつて、それに沿つて実践していくだけのことだ。」

先生召諸友至臥内、曰「安卿更有甚説話。」淳曰「兩日思量爲學道理。日用間（校1）做工夫、所以要步步縝密者、蓋緣天理流行乎日用之間、千條萬緒、無所不在、故不容有所欠缺。若工夫有所欠缺、便於天理不湊得著（1）。」曰（校2）「也是如此。理只在事物之中。做功夫（校3）須是密、然亦須是那疏處斂向密、又就那密處展放開。若只拘要那縝密處、又却（校4）局促（2）了。」問「放開底樣子如何。」曰（校5）「亦只是見得天理是如此、人欲是如此、便做將去。」

※楠本本は、本条を巻一「五（一五八三二頁以下）」に数段に分けて収める。

（校1）楠本本は、「問」を「問」に作る。

（校2）楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。

（校3）朝鮮整版・正中書局本・和刻本は、「功夫」を「工夫」に作る。

（校4）楠本本は、「却」の字を欠く。

（校5）楠本本は、「問」を「淳問」に作る。

（1）湊得著 「湊」は集める、併せる。ここの「湊得著」は、日常の中でも様々にその端緒を見せる天理を一つ一つ集めて総合し、その全容を網羅的にとらえ得るということ。

（2）局促 卷一「七・44条（一八二三二頁）」説下學工夫要多也好、但只理會下學、又局促了。須事事理會過、將來也要知箇貫通處。

淳「李丈（李唐咨）」の話では、廖倅（廖徳明）の手紙に「いかなる時にも『中庸』にいう戒慎恐懼の心持ちでいれば、天理もあまねく行き渡らない時はない。戒慎恐懼の心持ちにない時があれば、天理もまた時とてあまねく行き渡らない」とあつたということです。この言葉はいかがでしようか。」

朱子「そうでなければならない。しかし、そのように戒慎恐懼を重く説きすぎるべきではないし、またそのようにびくびくすることもない。ただいつも心を呼び覚まし、しっかりと把握して、常に保って失わない

ようにしていくだけのことだ。今のは、子思が『中庸』で、この「戒慎恐懼」の四字を強調しているのを見るや、事に臨んでひたすらびくびくすることと見なしてしまつてはいる。（『論語』のなかに曾子が『詩經』を引いて）「深淵に<sup>のぞ</sup>臨むが如く、薄冰を履むが如し」とあるが、曾子はただ道理に従つて、常にこのよう心を捕捉し続けていつただけだ。「黄義剛の記録」「そのように慎重に慎み深く心を持持していくただけのこと、まさかそんなふうにひたすらびくびくしていた訳ではあるまい。学問とはただこの心を常に保持しようとする」とに他ならない。」とは言え、戒慎恐懼に努めなくとも、道理が常に行き渡つてゐるのは、天地と聖人だけだ。聖人が「勉めずして中<sup>あ</sup>たり、思はずして得、從<sup>じゆう</sup>容として道に中<sup>あ</sup>たる」のも、やはりただこの心を常に保ち、道理が常に明らかであるからで、それだからこそそのようであり得たのだ。賢人が聖人と異なる理由、衆人が賢人と異なる理由というものは、ただ心を存しているかどうか、この僅かな違いだけなのだ。常々、人にとってこれで終わりというものはないと思つてゐるが、たとえ堯舜周孔であつても、まさか自分は「從容として道に中<sup>あ</sup>た」つており、戒慎恐懼する必要はないなどとは言つまい。彼等の学問修養も、もとより止むことはあり得ないのだ。

「黄義剛の記録ではこの後に続けて以下のように記す。

しばらくして、先生は再び安卿（陳淳）に質問した。

朱子「先ほどより話題にしてゐる天理・人欲について、君はどのように解釈するのか。」

陳淳「天下の事々物々に、天理が行き渡つていらないものはないと存じます。」

朱子「君のそのような言い方では、ただ天理があまねく行き渡つてゐるということをほんやり思い描くだ

けで、身近にある多くの修養について見失つてしまふ。」

「李丈（1）説廖倅（2）惠書有云、無時不戒慎（校1）恐懼（3）、則天理無時而不流行。有時而不戒慎恐懼、則天理有時而不流行。此語如何。」曰「不如此、也不得。然也不須得（4）將戒慎恐懼說得太重、也不是恁地驚恐（5）。只是常常提撕、認得這物事、常常存得不失。今人只見他說得此四箇字重、便作臨事驚恐看了。如臨深淵、如履薄冰（6）、曾子亦（校2）只是順這道理、常常恁地把捉去。「義剛錄作、恁地兢謹把捉去、不成便恁地驚恐。學問只是要此心常存。」若不用戒慎恐懼、而此理常流通者、惟天地與聖人耳。聖人不勉而中、不思而得、從容中道（7）、亦只是此心常存、理常明、故能如此。賢人所以異於聖人、衆人所以異於賢人、亦只爭這些子境界、存與不存而已。常（校3）謂人無有極則處、便是堯舜周孔、不成說我是從容中道、不要去戒慎恐懼。他那工夫、亦自未嘗得息。「義剛錄此下云、良久、復問安卿「適來所說天理人欲、正謂如何。」對曰「天下事事物物、無非是天理流行。」曰「如公所說、只是想像箇天理流行、却無下面許多工夫。」

※楠本本はここの一節を欠く。

（校1）正中書局本・和刻本は、「慎」を「謹」に作る。以下同じ。

（校2）朝鮮整版・正中書局本は、「亦」を「也」に作る。

（校3）朝鮮整版・正中書局本・和刻本は、「常」を「嘗」に作る。

(1) 李丈　李唐咨、字堯卿。陳淳の岳父。「丈」は目上につける尊称。慶元五年（一一九九）から翌年正月にかけて陳淳とともに建陽に赴き、朱熹に師事する。（田中謙二氏「朱門弟子師事年攷」『田中謙二著作集 第三卷』汲古書院、一二〇〇一）。卷一 一七・43条（一八一九頁）参照。

(2) 廖倅　廖徳明、字子晦。「倅」は州の通判（副長官）。卷一一三・20条（一七四三頁）に、「廖徳明赴潮倅」とあり、廖徳明が潮州通判であつたことが分かる。また、廖徳明が陳淳・李唐咨と同席していいた記録が卷四〇・45条（一〇三六頁）に見える。

(3) 戒慎恐懼　『中庸』（章句一章）「是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞」。

(4) 須得　（必ず）「しなければならない。」するべきだ。現代語の「定要」「應該」。「不須得」は「する必要がない、」すべきでない。卷一一三・38条（一七五一頁）「況天理人欲不兩立、須得全在天理上行、方見得人欲消盡」、卷八〇・77条（一一〇八七頁）「如看詩、不須得着意去裏面訓解、但只平平地涵泳自好」。

(5) 驚恐　驚愕する。慌てふためき、恐れおののく。卷九五・127条（一四四七頁）「心大則自然不急迫。如有禍患之來、亦未須驚恐」。

(6) 如臨深淵、如履薄冰　『詩』小雅・小旻。『論語』泰伯「曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後、吾知免夫、小子」。

(7) 不勉而中、從容中道　『中庸』（章句二十章）「誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也」。

朱子「(『中庸』で) 子思は「徳性を尊ぶ」と説きながら、また「問学に道る」とも説いている。「広大を致す」と説きながら「精微を尽す」とも説き、「高明を極む」と説きながら「中庸に道る」と説き、「故きを温ぬ」と説きながら「新しきを知る」とも説き、「敦厚」を説きながら「礼を崇ぶ」とも説く。これら五句は学問をおさめ修養に努めるとの精密・粗雑を全て言い尽くしている。ところが君の述べていることは、「徳性を尊ぶ」ことに偏つてしまつており、自分に都合のよいところだけを選ぶもので、「問学に道る」ことの数多くの修養を欠いている。「黄義剛の記録「重要なことを見失つてゐる。」」ただ自分に都合のよいことだけを行ない自分で自分をよしとするような学では、門を出て歩き出すや障碍が現れ、何一つできはしまい。今の人々の問題は、無駄に末事にばかり努めて根本を究めないとということにある。しかし、ただ根本に取り組んでいくだけで、末事に取り組まないのであれば、「黄義剛の記録「末事を捨ておいたのであれば、」」それもまた良くない。

時勢は日々新たに変化して窮まるることはない。どうして将来何か起る事が我々には関係ないと言えようか。そのうちに事が起つたならば、当然応じるべきことには応じなければならない。もしだだ自分のことだけを考えて事足れりとしてしまつたならば、修養に努めて十二分にまで達しようとも、結局様々な事変に応じ切れないだろう。その時になつて、変化に対応できないと言われるのを嫌つて、無理矢理に対応しようとしても、それではただ杜撰なことをしでかすだけだ。これが人欲なのであり、また誤つて人欲を天理とみなしてしまつことまで出でてしまつ。もし変化に対応しながら、それが義理（正しい道理）に合致しないと

したら、常日頃の数多くの修養が相変わらずすべて誤っていたということだ。」

子思説尊徳性、又却説道問學。致廣大、又却説盡精微。極高明、又却説道中庸。溫故、又却説知新。敦厚、又却説崇禮（1）、這五句是（校1）爲學用功精粗、全體說盡了。如今所說、却只偏在尊徳性上去、揀那便宜多底占了、無道問學（校2）底許多工夫。「義剛錄作、無緊要看了（校3）。」恐只是占便宜（2）（校4）自了之學、出門動步便有礙、做一事不得。今人之患、在於徒務末而不究其本。然只去理會那本、而不理會那末、「義剛作、颺下了那末（校5）。」亦不得。時變日新而無窮、安知他日之事、非吾輩之責乎。若是少問事勢之來、當應也只得應（校6）。若只是自了、便待工夫做得二十分到、終不足以應變。到那時、却怕人說道不能應變、也（校7）牽強去應、應得便只成杜撰（校8）、便只（校9）是人欲、又有誤認人欲作天理處。若（校10）應變不合義理、則（校11）平日許多工夫、依舊都是錯了。

（校1） 楠本本は、「是」の字を欠く。

（校2） 朝鮮整版・正中書局本は、「道問學」を「道學問」に作る。

（校3） 楠本本は、「義剛錄作、無緊要看了」の小字注を欠く。

（校4） 楠本本は、「占便宜」を欠く。

（校5） 楠本本は、「義剛作、颺下了那末」の小字注を欠く。

（校6） 楠本本は、「若是少問事勢之來、當應也只得應」を欠く。

(校7) 楠本本は、「到那時、却怕人說道不能應變、也」を欠く。

(校8) 楠本本は、「應得便只成杜撰」を「又成杜撰、既是杜撰」に作る。

(校9) 楠本本は、「只」の字を欠く。

(校10) 楠本本は、「若」の字を欠く。

(校11) 楠本本は、「則」の字を欠く。

(1) 子思説尊徳性（又却説崇禮）『中庸』（章句二七章）「大哉聖人之道。洋洋乎、發育萬物、峻極于天。優優大哉。禮儀三百、威儀三千。待其人而後行。故曰苟不至德、至道不凝焉。故君子尊徳性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸、溫故而知新、敦厚以崇禮。是故居上不驕、爲下不倍、國有道其言足以興、國無道其默足以容。詩曰、既明且哲、以保其身。其此之謂與。」

(2) 占便宜　自分の利益だけを求める、うまい汁を吸う。卷一一三・14条（二七四二頁）「問、佛氏似亦能慎獨。曰、他只在靜處做得、與此不同。佛氏只是占便宜、討閑靜處去」、卷一二五・36条（二九九六頁）「常見畫本老子便是這般氣象、笑嘻嘻地、便是箇退步占便宜底人」。

朱子「君たちは遠方に引つ込んでいて、ともに議論をする師友もない。また各地の賢士に接することもせず、遠方の事情も知らないし、古今の人事の変遷にも明るくない。そんなふうにしてると何もわからなくなってしまいがちだ。一日の間、物事の変化は窮まりない。小さなことでは一人の身にも多くの事が起こり、

家にも多くの事が起ころる。大きなことでは一国、さらには天下と、取り組むべき事はこんなに多くあり、すべて自分がやらなければならないのだ。自分がやらずして、いつたい誰にやらせようというのか。まさか自分は身近なことしかしないというわけにはいくまい。そんな学問で変化に対応しようしても、どうやって数多くの事情に通じ、数多くの事を行なうことができようか。学ぶ者はこの心をしっかりと立て、精粗巨細もらさずあまねく天下の事を観ていかなければならない。そうしているとそのうちそれが一つになり、どれだけ多様な事柄であってもやはり同じことであることが分かるようになる。そうなつてこそ現実の場面で役に立つのだ。精だけを選んでこっちに置いておき、粗はあっちに置いておくのではない。」

（校1）吾友僻在遠方、無師友講明、又不接四方賢士、又不知遠方事情、又不知古今人事之變、這一邊易得暗昧了。一日之間、事變無窮（校2）、小而一身有許多事、一家又有許多事、大而一國、又大而天下、

事（校3）恁地多、都要人與他做。不是人做、却教誰做（校4）。不成我只管得自家。若將此樣學問去應變、如何通得許多事情、做出許多事業。學者（校5）須是立定此心、汎觀天下之事、精粗巨細、無不周徧。下梢打成一塊、亦（校6）是一箇物事、方可見於用。不是揀那精底放在一邊、（校7）粗底放在一邊。

（校1）楠本本は、「吾友」の前に「又曰」が入る。

（校2）楠本本は、「了、一日之間、事變無窮」を欠く。

（校3）楠本本は「恁地」の前に「又」が入る。

(校4) 楠本本は、「不是人做、却教誰做」を欠く。

(校5) 楠本本は、「學者」を欠く。

(校6) 楠本本は、「亦」の字を欠く。

(校7) 楠本本は、「粗底」の前に「揀那」が入る。

朱子「以前、胡文定（安国）が曾吉甫（幾）に答えた書簡に、人はただ天理を存し人欲を去らなければならぬという論があるのを見たが、後半はひたすらこの論を称賛しているだけで、これについて全く分析を加えていない。これは先輩たちが人の為ためにすることができるなかつたところである。しかし、こここそまさにしつかり捉まえて分析しなければならないのだ。

いわゆる天理・人欲とは、一つの大綱のようなものであり、その下には無数の具体的な条目がある。必ず具体的な事物の上でどれが天理でどれが人欲かを弁別しなければならない。あんなふうに空虚に語つて、大綱をすっぽりかぶせて天理と人欲の区別を曖昧にしてしまってはならない。そんなことをしていれば、ひたすら曖昧になってしまい、どうにもならなくなってしまうだろう。例えば道具を作るならば、当然良いものを作らせるものであつて、まさか最初から良くないものを作ろうとはしないだろう。良いものが天理であり、良くないものが人欲である。しかし、良いものはどこが良いのか、どのようにすれば良いものが作れるのかをあれこれ考え方検討しなければならないのだ。「黄義剛の記録は「しかし、おおよそはこのようである。例

えばこの土瓶を作るならば、どのようなものが良く、どのようなものが良くないかを知らなければならない。それを、大雑把に良いというだけで、どこがどのように良いのか尋ねられても分からぬようでどうして済まされようか」に作る。」

嘗見（校1）胡文定答曾吉甫書有、人只要存天理去人欲之論（1）、後面一向稱贊、都不與之分析、此便是前輩不會爲人處。此處正好捉定與他剖始得。所謂（校2）天理人欲、只是一箇大綱如此、下面煞有條目。須是就事物上辨別那箇是天理、那箇是人欲。不可恁地空說、將大綱來（校3）罩却、籠統無界分。恐一向暗昧、更動不得。如做器具、固是教人要做得好、不成要做得不好。好底是天理、不好底是人欲。然須是較量所以好處、如何樣做方好、始得。「義剛錄云、然亦大概是如此。如做這湯瓶、須知是如何地是好、如何地是不好。而今只儻侗說道好、及我問你好處是如何時、你却又不曉、如何恁地得（校4）。」

（校1）楠本本は、「嘗見」を「又曰」に作る。

（校2）楠本本は、「所謂」を欠く。

（校3）楠本本は、「來」を「夾」に作る。

（校4）楠本本は、「義剛錄云、如何恁地得」の小字注を欠く。

（1）胡文定答曾吉甫書有、人只要存天理去人欲之論 卷一〇一・137条（二五八〇頁）「曾吉甫答文定書中天理人欲之說、只是籠罩、其實初不曾見得」、卷一〇四・20条（二六一五頁）「某尋常看文字都曾疑

來。如上蔡觀復堂記、文定答曾吉甫書、皆曾把做孔孟言語一般看。久之、方見其未是。每一次看透一件、便覺意思長進」。

朱子「今しばらくは、ふだん読む書物の中で、古人がどんなことを行ない、どこが正しくどこが正しくないか、あるいはどこは疑うべきでどこは疑うべきでないのかを見極めていけば、自ずと分かつてくる。更にそれがふだんの自分の行為においてどのようなことになるのか、何が正しいのかを考えるようにしなさい。

そうやつて数段読んでいけば、天理の天理たる所以、人欲の人欲たる所以は分かるだろう。」

そこで私（陳淳）は、先年喪に服した際、繁雑な葬礼を最初から最後まで全て自ら受け持ち、弟にはびたいちゃん一文要求するつもりはなかつたことを申し上げた。

朱子「それも当然のことだ。」

淳「葬礼に臨む段になると、同席していた長老たちが日柄がよくないと言い出しましたが、私は全く取り合いませんでした。ただ、墓所を定める際には、吉日をトトつトて行ないました。」

朱子「そういうやり方は、天理というものを杓子定規で固いものにしてしまう。」

李丈（唐咨）「しかし、長老たちもそれで説得されました。」

朱子「幸い、たまたま衝突しなかつただけだ。もしうまくかみ合わなければ、少しく融通を加えても構わない。」

淳「大祥（二年目の葬祭）の翌日、親族の長老が酒食の会を行ないましたが、私はそれを避けました。後聞いたところ、長老たちは頻りに私のことを尋ねていたそうで、恐縮してしまいました。いかがすべきだったのでしょうか。」

朱子「酒食を避けたのは結構だが、それはそんなに重要なことではない。『礼記』に「君これに食を賜へば、則ちこれを食す。父の友これに食せしむれば、則ちこれを食す。梁肉（穀物と肉、贅沢な食事）も避けず」とある。私も最初はこの一文を疑つた。しかし後に思つたことは、それはその一食だけのこと、その後元通り食べなければよいのだ。父の友人で許されるのならば、長老の命はなおさら、その一食ぐらい構わない。ただし（同じく『礼記』に）「もし酒醴有らば、則ち辞す」とあるように、酒は辞退しなければならない。」

〔黄義剛の記録も同じ。〕

「（校1）今且將平日看甚書中、見得古人做甚事、那處是、那處不是、那處可疑、那處不可疑、自見得。又看（校2）是如何於平日做底事（校3）、甚麼處是。舉數（校4）段來、便見得所以爲天理、所以爲人欲。」淳因舉向年居喪、喪事重難、自始至終、皆自擔當、全無分文（1）責備舍弟之意。曰（校5）「此也是合做底。」淳曰「到臨葬時、同居尊（校6）長皆以年月不利爲說、淳皆無所徇。但治壙事辦、則ト一日爲之。」曰（校5）「（校7）此様天理又是硬了。」李丈曰「亦是尊長說得下（2）。」曰（校5）「幸而無齟齬耳。若有不能相從、則少加委曲、亦無妨。」淳曰「大祥（3）次日、族中尊長爲酒食之會、淳走避之。後來聞尊長鎮日相尋、又令人惶恐。如何。」曰（校5）「不喫也好、然此亦無緊要。禮君賜之食、則食之。父之友食之、

則食之、不避梁肉（4）。某始嘗疑此。後思之、只是當時一食、後依舊不食爾。父之友既可如此、則尊長之命、一食亦無妨。若有酒醴則辭（5）。「義剛同（校8）」

（校1）楠本本は、「今且」の前に「又曰」が入る。

（校2）楠本本は、「看」の字を欠く。

（校3）楠本本は、「做底事」を「做甚底事」に作る。

（校4）楠本本は、「數」を「二」に作る。

（校5）楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。

（校6）楠本本は、「尊」を「爲」に作る。

（校7）楠本本は、「此様」の前に「同居」が入る。

（校8）楠本本は、「義剛同」の小字注を欠く。

（1）分文 一分一文。わずかな金錢。びた一文。

（2）説得下 『考文解義』に「蓋謂尊長亦聽之」とあるのに基づいて解釈した。「説下」は現代語の「講好」「談清楚」。ここは、長老たちを説得できたという意味か。

（3）大祥 父母の死後二年目に行う葬祭の儀。

（4）君賜之食へ不避梁肉 『礼記』喪大記「既葬、若君食之、則食之。大夫父之友食之、則食之矣。不

辟梁肉。若有酒醴則辭」。

(45条担当 松野 敏之)

【二二七・46】

夜、再び私（陳淳）と李丈（李唐咨）が呼ばれ、先生の寝室に伺つた。

朱子「君たちはもうじき帰郷する。もつと議論しておくことはないかね。」

私は『論語』の「点に与する」についての拙論を読みあげた。

朱子「大筋はよいが、やはり一つ二つ小さな誤りがある。」

また廖倅（廖徳明）が拙論を批判した手紙も読みあげた。

朱子「当たつてゐるところもあり、当たらないところもある。」

さらに、私から廖倅への返書も読みあげた。

朱子「天下万物の、必ずそうでなければならない規則性、それが理だ。それがそうである根拠、それが大本のところだ。今の君の話はもちろんその通りなのだが、聖人は平生、天理がどこそこにあると言つておいて、人にそこに集中して取り組ませたりはしない。ただ眼前の具体的な事柄だけを語つて、人に淡々と修養に取り組ませ、自然と天理を悟らせたに過ぎない。」

淳「修養に取り組んだ後に天理を悟るというのは、それでよいと思うのですが、修養に取り組む前に、ま

ずは天理を探求しておく必要はないのでしょうか。」

朱子「結局、先に天理を求めてそこに立脚してしまって、気持ちが高遠などころにばかり向いてしまって、

足元の地道な多くの修養をないがしろにしてしまひ易いのだ。」

是夜再召淳與李丈（1）（校1）入臥内、曰「公歸期不久、更有何較量（2）。」淳讀與點說（3）。曰（校2）「大概都是、亦有小小一兩處病。」又讀廖倅書所難與點說。先生曰「有得有失。」又讀淳所回廖倅書。先生曰「天下萬物當然之則、便是理。所以然底、便是原頭處。今所說、固是如此。但聖人平日也不會先說箇天理在那裏、方教人做去湊。只是說眼前事、教人平平恁地做工夫去、自然（校3）到那有見處。」淳曰「因（校4）做工夫後、見得天理也無妨。只是未做工夫、不要先去討見天理否。」曰（校5）「畢竟先討見天理、立定在那裏、則心意便都在上面行、易得將下面許多工夫放緩了。」

※楠本本は本条を巻一一五（一五八四頁以下）に数段に分けて收める。途中「孔門惟顏子」から「教人有序」まで、「志於道」より以下すべてを欠く。

（校1） 楠本本は「丈」を「文」に作る。

（校2） 楠本本は「曰」の前に「與先生聽先生」が入る。

（校3） 楠本本は「然」の字を欠く。

（校4） 楠本本は「因」を「只」に作る。

（校5） 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

（1） 再召淳與李丈　　巻一一七・45条参照。李丈は李唐咨、陳淳の岳父。

(2) 較量　議論する、検討する、比較する。卷一一三・29条（二七四八頁）「先生語漢卿、有疑未決、可早較量」、卷一・76条（一八六頁）「蓋熟讀後、自有窒礙不通處、是自然有疑、方好較量」。

(3) 與點說　『論語』先進「夫子喟然歎曰、吾與點」。卷一一七・43条（二八二〇頁）「向來所呈與點說一段如何」以下の議論参照。『北溪大全集』卷八「詳集注與點說」参照。

朱子「孔子の門人では顏子・曾子・漆雕開・曾点だけがこの道理を明確に理解していた。顏子はもとより資質に優れていたが、それでも初めは（孔子のことを）「之を仰げばいよいよ高く、之を鑽ればいよいよ堅し」と感嘆しているように、どこから手をつけたらいいのかわからなかつた。（孔子が）「我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす」と誘つてくれたことを頼りに努力し、「罷まんと欲するも能わず、吾が才を竭くす」という段階に到つて、はじめて（孔子が）「立つ所有りて卓爾たるが如し」ということがわかるようになつたのだ。つまり、それまでぼんやりとしていたことが、ここに到つてすべてひとつに統合されたのだ。曾子も初めは手がかりがなく、ひたすら下からよじのぼるように地道な努力を積み重ね、それが十分なところに到つてようやく（孔子のいう）「一貫」を悟つたのだ。漆雕開は「吾れ斯れを之れ未だ信ずること能わづ」と言つたが、「斯れ」とは何か。彼はそれ（道理）を理解していたということだ。曾点はどういうわけだか、最初からそれがほぼ見えていた。「曾点と漆雕開はすでに要のところを理解していた」というのは、程先生がそう言われたのだ。漆雕開の方は穩健で、曾点の方が聰明でのびのびしていたが、彼に

地道な努力がなかつたかどうか、或いは行き着く先が結局どうなつたのかは別問題だ。ただ孟子に「狂」と呼ばれたことや、『礼記』檀弓に書かれていることを見ると、結末は所詮あんなものだ。曾子父子の学問は対照的で、一人は下から積み上げてゆくもので、一人は上から理解をしている。子貢も修養が七、八割方に達していたので、聖人（孔子）も彼に気付かせようとしたが、完全に悟らせるることはできなかつた。聖人は道理を言わないのでないし、さりとてすぐに直接道理を言うわけでもない。ただ道理を言うには時機があり、人を教えるには順序があるのだ。」

孔門惟顏子曾子漆雕開會點見得這箇道理分明。顏子固是天資高、初間仰之彌高、鑽之彌堅（1）、亦自討頭（2）不著。從博文約禮做來、欲罷不能、竭吾才、方見得如有所立卓爾、向來鬚臾底、到此都合聚了。曾子初亦無討頭處、只管從下面捱來捱去、捱到十分處、方悟得一貫（3）。漆雕開曰、吾斯之未能信（4）。斯是何物。便是他見得箇物事。曾點不知是如何、合下便被他綽見（5）得這箇物事。曾點漆雕開已見大意（6）、方是程先生恁地說。漆雕開較靜、曾點較明爽、亦未見得他無下學工夫、亦未見得他合殺（7）是如何。只被孟子喚做狂（8）、及觀檀弓所載（9）、則下梢只如此而已。曾子父子之學自相反、一是從下做到、一是從上見得。子貢亦做得七八分工夫、聖人也要喚醒他、喚不上（10）。聖人不是不說這道理、也不是便說這道理、只是說之有時、教人有序。

※楠本本は、二二の一段を欠く。

(1) 仰之彌高、鑽之彌堅 『論語』子罕「顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。

夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、未由也已」。

(2) 討頭 手がかり・糸口・とつかかり（を搜す）、脈絡（をつかむ）。卷一二〇・18条（二八八七頁）

「而今人不去理會底、固是不足說、去理會底、又不知尋繫要處、也都討頭不著」、卷十一・135条（一九

六頁）「通鑑是逐年事、逐年過了、更無討頭處」。

(3) 一貫 『論語』里仁「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰

夫子之道、忠恕而已矣」。

(4) 吾斯之未能信 『論語』公冶長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說」。『集注』「斯、指此理而言」。

(5) 線見 ちらつと見る。「線」はおおよそ、だいたいの意。卷四〇・43条（一〇三六頁）「曾點爲人高爽、日用之間、見得這天理流行之妙、故堯舜事業亦不過自此做將去。然有不同處、堯舜便是實有之、踏實做將去。曾點只是偶然綽見在。譬如一塊寶珠、堯舜便實有在懷中、曾點只看見在、然他人亦不會見得」、卷三九・43条（一〇一八頁）「曾子魯鈍難曉、只是他不肯放過、直是推得到透徹了方住。不似別人、只略綽見得些小了便休」。

(6) 曾點漆雕開已見大意 『遺書』卷六・106条（八七頁）「曾點漆雕開已見大意、故聖人與之」。曾点については前段注（3）、漆雕開についてはこの段の注（4）参照。

(7) 合殺 収まり処、結末。次の条を参照、卷四〇・35条（一〇三三頁）「孔門如曾點、只見識高、未

見得其後成就如何」。

(8) 被孟子喚做狂 『孟子』尽心下「如琴張曾皙牧皮者、孔子之所謂狂矣」。「孔子之所謂狂」は、「論

語」子路「不得中行而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不爲也」、公冶長「子在陳曰、歸與、歸與。吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之」。

(9) 檀弓所載 『礼記』檀弓下「李武子寢疾。……及其喪也、曾點倚其門而歌」。

(10) 子貢亦做得七八分工夫、聖人也要喚醒他、喚不上 『論語』に多数見られる子貢とのやりとり全体に基づく発言であろうが、例えば次の条などが念頭にあつたか。衛靈公「子曰、賜也、女以予爲多學而識之與。對曰、然、非與。曰、非也、予一以貫之」。

朱子「子晦（廖徳明）の説は捉えどころがない。しかし、君の言うことは根本的に、先ずは天理を目の前に見定めて、それから実践しようというもの、それが正に欠点なのだ。子晦が疑問に思つたのももつともなことだが、彼はそれを上手く指摘できていないだけだ。君は口を開けば、その欠点だ。先に「立つ所有りて卓爾たるが如し」の境地を悟つて、その後で「博文」「約礼」に取り組むようなものだ。まるで天理というものをじつと掘まえて離さず、空虚な何かをこつちに置こうにも置き所がなく、あつちに置こうにも置き所がなく、こつちに置いてもひっくり返りそう、あつちに置いてもひっくり返りそうというような具合だ。天理というものは、言葉で捉えようとすれば流動的でじつとしておらず、ひと塊の水銀のようにころころと捉

えどころがない。あるいは水の流れに沿つて水源へ遡らずに、その場ですぐに水源を求めるようなもの、そんなことをすればあれこれ穿鑿するばかりで、結局はたどり着けはしない。（孔子が）「下學して上達す」というように、学問修養には順序次第がある。「下學」の中にも順序次第がある。「致知」にもいくつかの段階があり、実践にもいくつかの段階がある。」

子晦之說無頭（1）。如吾友所說從原頭來、又却要先見箇天理在前面、方去做、此正是病處。子晦疑得是、只說不出。吾友合下來說話、便有此病。是先見（校1）有所立卓爾、然後博文約禮也。若把這天理不放下相似、把一箇空底物、放這邊也無頓處、放那邊也無頓處。放這邊也恐顛破、放那邊也恐顛破。這天理說得蕩漾（校2）、似（校3）一塊水銀、滾來滾（校4）去、捉那（校5）不著。又如水不沿流遡源、合下便要尋其源、鑿來鑿去、終是鑿不得（校6）。下學上達（2）、自有次第。於下學中又有次第。致知（3）又有多少次第、力行又有多少次第。

（校1）楠本本は「見」の字を欠く。

（校2）楠本本は「漾」を「様」に作る。

（校3）楠本本は「似」を「相似」に作る。

（校4）楠本本は「滾」を「滾」に作る。

（校5）楠本本は「那」を「他」に作る。

（校6）楠本本、朝鮮整版は「得」を「着」に作る。

(1) 無頭 捉えどころがない、とりとめのない、わけがわからない、でたらめな。卷九七・2条(二四七九頁)「佛法只作一無頭話相欺誑、故且恁地過、若分明說出、便窮」、卷六九・38条(一七一七頁)「坤卦是箇無頭物事、只有後面一節、只是一箇持守柔順貞固而已、事事都不能爲首、只是循規蹈矩、依而行之」。

(2) 下學上達 『論語』憲問「不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎」。

(3) 致知 『大學』(章句經一章)「古之欲明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。」

(46条前半担当 佐々木仁美)

陳淳 「『下學』の中で例えば「致知」に取り組んでいる時にも、所謂「上達」の意味合いを理解することがあるのでないでしようか。」

朱子 「そうではない。「致知」ならば、まずは物事に即して、なすべきことは何かを理解するのだ。しばらくして、その同じ事柄に関して、何故そのようにすべきかを考える。そうすると、その事柄が道理としてそうしなければならないということが分かる。その上で更に、どのような道理としてそうでなければならぬのかを考える。そうすると、その事柄の道理の根本のところがわかる。一つ一つの事柄についてすべてこ

のよう取り組めば、それぞれの事柄の根本のところを知ることができるので。」

淳「それぞれの事柄すべてにその根本のところがわかつたならば、それらが集まり合わさつて一つのものになるのでしょうか。」

朱子「一つになるかならないかを気にする必要はない。ひたすら一つずつそうやつていけば、千件の事柄は千件のものと成り、一万件の事柄は一万件のものと成り、そのうち自然に一つのものになる。水到れば船浮ぶ、ということだ。」

淳曰「下學中、如致知時、亦有理會那上達底意思否。」曰「非也。致知、今且就這事上、理會（校1）箇合做底是如何。少間、又就這事上思量合做底、因甚是恁地。便見得這事道理合恁地。又思量因甚道理合恁地。便見得這事道理原頭處。逐事都如此理會、便件件知得箇原頭處。」淳曰「件件都知得箇原頭處、湊合來、便成一箇物事（校2）否。」曰「不怕不成一箇物事。只管逐件恁地去、千件成千箇物事、萬件成萬箇物事、將間自然撞著成一箇物事、方如水到船浮（1）。」

（校1）楠本本は、「會」を「合」に作る。

（校2）楠本本は、「事」の字を欠く。以下同じ。

（1）水到船浮　卷一一七・43条（二八一九頁）「淳曰、數年來見得日用間大事小事分明、件件都是天理流行、無一事不是合做底、更不容挨推閃避。……見面前只是理、覺如水到船浮、不至有甚慳澁、而夫子

與點之意、顏子樂底意、漆雕開信底意、……覺見都在面前、真箇是如此」。

朱子「いましばらくはそういう（「上達」だの、一つにしようだのという）心を置いておいて、地道に淡淡とやつていきなさい。書物を淡淡とあるがままに読み、高遠さを求めたりしないことだ。一回目は、まず一重目の大枠の文意が何かを理解し、二回目には、もう一度その一重目を取り上げて、その内側の一重目がどういう意味かを考える。三回目には、またその二重目を取り上げて、更に三重目の意味を考える。そのようく繰り返し考えてゆき、二十回目、三十回目となれば、自然に道理の理解が穩当に落ち着く。たった一段を読んだだけで、すぐにその一段について考え方込み、根本のところを探し当てようなどということをしてはならない。例えば（『中庸』）「天の命<sup>めい</sup>づるを之れ性と謂う」ならば、まずはそのまま淡淡と読んでゆけば、その後「性に率<sup>したが</sup>うを之れ道と謂う」を読むことになる。もし「天の命づるを之れ性と謂う」の一句を反復して読むばかりでは、「性に率うを之れ道と謂う」を読む余力がなくなってしまう。「喜怒哀楽の未だ發せざるを之れ中<sup>じゆう</sup>と謂う」ならば、まずはそのまま淡淡と読んでゆけば、その後すぐに「發して皆な節に中の力を之れ和<sup>わ</sup>と謂う」を読むことになる。もし「未發の中」を繰り返し読むばかりでは、「中節の和」を読む余力がなくなってしまうのだ。」

而（校1）今且去放下此心、平平恁地做。把文字來平看、不要得高。第一番、且平看那一重文義是如何。

第二番、又掲起第一重、看那第二重是如何。第三番、又掲起第二重、看那第三重是如何。看來看去、二十番三十番、便自見得道理有穩處。不可才看一段、便就這一段上要思量到極、要尋見原頭處。如（校2）天命之謂性（1）、初且恁地平看過去、便看下面率性之謂道（1）。若只反倒這天命之謂性一句、便無工夫看率性之謂道了。喜怒哀樂未發之謂中（2）、亦且平看過去、便看發而皆中節謂之和（2）。若只反倒這未發之中、便又無工夫看中節之和了。」

（校1）楠本本は、「而」の字を欠く。

（校2）楠本本は、「天命」の前に「中庸」が入る。

（1）天命之謂性・率性之謂道　『中庸』（章句經一章）「天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教」。

（2）喜怒哀樂未發之謂中・發而皆中節謂之和　『中庸』（章句經一章）「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉」。

朱子「聖人の教えはただ一つ、万民から公・卿・大夫・士に至るまでみな同じだ。例えば（孟子にいう）「父子親有り、君臣義有り」ならば、初めはこの両句があつたに過ぎない。後に「父子親有り」の中から多くのことを敷衍し、「君臣義有り」の中から多くのことを敷衍したのだ。「親有り」「義有り」とはどのようでなければならないかを考え、更にはなぜ「親有り」なのか、なぜ「義有り」なのか、道理がそうでなければ

ばならない根拠を理解しなければならない。一つずつ推し上つてゆけば、自ずと大本のところが分かるようになる。ひたすらそやつて努力していつて、それなりにものになれば幸いだ。」

又曰（校1）「聖人教人、只是一法、教萬民及公卿大夫士之子皆如此。如父子有親、君臣有義（1）、初只是有兩句。後來又就父子有親裏面推說許多、君臣有義裏面推說許多。而今見得有親有義合恁地、又見得因甚有親、因甚有義、道理所以合恁地。節節推上去、便自見原頭處。只管恁地做工夫去、做得合殺（2）、便有采（3）。」

（校1）楠本本は、「又曰」を欠く。

- （1）父子有親、君臣有義 『孟子』滕文公上「人之有道也、飽食、煖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」。
- （2）合殺 本条第二段注（7）参照。ここでは、收拾がつく、收まりがつくの意。
- （3）有采 運が良い、幸運だ。

朱子「聖人の教え方は、下の部分（卑近で地道な「下学」の実践）を説くだけで、しばらくしてその段階に到達したら、また少し押し上げて説くという具合で、いきなり上の段階（聖人「上達」の境地）にまで説

き及ぶことはない。(『論語』にあるように)「子、四つを以て教う、文・行・忠・信」なのだ。また「博く学んで篤く志し、切に問うて近く思わば、仁は其の中に在り」というように、多くのことが行なえば、仁は自ずとその中に在る。「道に志し、徳に拠り、仁に依り」、さらにまた「芸に游ぶ」というように、まさかただ一言で事足れりといふものではない。もしだだ一言で足るのであれば、どうして更に多くの言葉を用いただろう。「詩三百、一言以て之を蔽え、曰く、思ひ邪なし」といしながら、聖人はどうしてこの「思ひ邪なし」の一句だけを遺して、その他の詩を削除しなかつたのか。なにゆえ三百篇を編纂してはじめて「思ひ邪なし」を取り上げたのか。三百篇を読むに、そこに語られなかつたことがあらうか。」

朱子「莊子と列子も曾点の心持ちに似ている。彼らも老子だけを学んだのではなく、吾が儒の書物もすべて読んでいて、どのようにしてだか分からぬが彼らは我々の道理をおおまかに理解していたのだが、放縱になつてしまつた。今の禅学も同様だ。」

朱子「(孔子が自らを語つた)「二三子、我を以て隠せりと為すか。吾爾なんじに隠すこと無し。吾行なうとして二三子に与よさざる者無し。是れ丘なり」について、多くの人は奥深かげに解釈しているが、程先生の解釈は煩瑣だ「黄義剛の記録では「くどくどしい」」。後日詳細に検討してみて、ようやく多くの人の解釈はどれも禅のようになつてしまつていて、程先生のように穏当でないことが分かつた。」「黄義剛の記録も同じ。」

又曰(校1)「聖人教人、只是說下面一截、少間到那田地又挨上些子、不曾直說到上面。子以四教、文行

忠信（1）。又曰博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣（2）。做得許多、仁自在其中。志於道（校2）、據於德、依於仁、又且游於藝（3）、不成只一句便了。若只一句便了、何更用許多說話。如詩三百、一言以蔽之曰思無邪（4）。聖人何故不只存這一句、餘都刪了。何故編成三百篇、方說思無邪。看三百篇中那箇事不能說出來。又曰「莊周列禦寇亦似曾點底意思（5）。他也不是專學老子、吾儒書他都看來、不知如何被他綽見這箇物事、便放浪去了。今禪學也是恁地。」又曰「二三子以我爲隱乎。吾無隱乎爾。吾無行而不與二三子者、是丘也（6）。向見衆人說得玄妙、程先生說得絮（7）。「黃作切怛。」後來子細看、方見得衆人說、都似禪了、不似程先生說得穩。」

〔義剛同。〕

（校1）楠本本は、「又曰」を欠く。

（校2）「志於道」以下の部分は、楠本本「訓門人」には收められていない。

（1）子以四教、文行忠信 『論語』述而。

（2）博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣 『論語』子張「子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。」

（3）志於道、據於德、依於仁、又且游於藝 『論語』述而。

（4）詩三百、一言以蔽之曰思無邪 『論語』為政。

（5）莊周列禦寇亦似曾點底意思 卷四〇・12条（一〇二七頁）「曾點意思、與莊周相似、只不至如此跌蕩。莊子見處亦高、只不合將來玩弄了」。

(6) 二三子以我爲隱乎。吾無隱乎爾。吾無行而不與二三子者、是丘也。

『論語』述而。

(7) 程先生說得絮

『程子粹言』卷一・聖賢篇2条(一一二九頁)

「子曰、聖人之道猶天然。門弟子親炙而冀及之、然後知其高且遠也。使誠若不可及、則趨向之心不幾於怠乎。故聖人之教、常俯而就之。曰、吾無隱乎爾。吾非生知、好古敏而求之者也。非獨使資質庸下者勉思企及、而才氣高邁者亦不敢譖等而進也」。なお、この箇所は『論語集注』述而の注に引用されている。『河南程氏經說』卷六「論語解」述而(一一四六頁)「子曰、二三子以我爲隱乎、孔孟之道一也。其教人則異。孔子常俯而就之。孟子則推而高之。孔子不俯就、則人不親。孟子不推高、則人不尊。聖賢之分也。二三子不能窺見聖人。故夫子告之以無隱也」。

### 【一一七・47】

陳淳「昨夜、いきなり天理を求めようとするべきではないとの御教示を賜りました。私としては、内心もう少し疑問に思うところがあります。やはり一つの事柄にはそれぞれ一つの当然の理があり、真にこの理を掴めれば、その事柄も確実に行えましょう。そうでなければ、心は結局揺らいでしまうかと思います。如何でしょうか。」

朱子「それは、確かに一つの事柄の理というものではある。昨夜話したのは、一つの渾然とした大きなも

(46条後半担当 宮下 和大)

のがここにあるのをまず擱んだから、そこから広げて、あらゆる事柄を行つていくというのではいけないと  
いうことだ。事に対し理を顧みず、ひたすら盲目的に行うということではない。親に仕える中に自ずと親  
に仕える道理があり、年長者に仕える中に自ずと年長者に仕える道理がある。この事には自ずとこの道理が  
あり、あの事には自ずとあの道理がある。それぞれ徹底的に理解すれば、たくさん事柄がそれぞれにたく  
さんの道理を成す。それら全てが集まってきた、それが一つの渾然とした道理なのである。今いきなり（孔  
子の）「一」に取り組もうとするばかりで「貫」を疎かにすれば、物事の本末を取り違え、何も理解するこ  
となく終わる。曾子の平生の努力は、ひたすら貫く対象である数々の事柄について、とことんまで実践する  
ものであった。夫子はそこで、はじめて彼を呼び覚ますように「私の道理は、一つのことで貫いている」と  
言い、曾子はすぐさま理解できたのだ。一つの渾然としたものを抱いて、それを広げようというのではない。

〔黄義剛の記録も同じ。〕

問（校1）「前夜承教誨（校2）、不可先討見天理（1）、私心更有少疑。蓋一事各有一箇當然之理、真見  
得此理、則做此事便確定。不然、則此心未梢又會變了。不審如何。」曰「這自是一事之理。前夜所說、只是  
不合要先見一箇渾淪大底物攤（校3）在這裏、方就這裏放出去做那萬事、不是於事都不顧理、一向冥行而已。  
事親中自有箇事親底道理、事長中自有箇事長底道理。這事自有這箇道理、那事自有那箇道理。各理會得透、  
則萬事各成萬箇道理。四面湊合來、便只是一箇渾淪道理。而今只先去理會那一、不去理會那貫（2）、將尾  
作頭、將頭作尾、沒理會了。曾子平日工夫、只先就貫上事事做去到極處、夫子方（校4）喚醒他說、我這道

理、只用一箇去貫了、曾子便理會得。不是只要抱一箇渾淪底物事、教他自流出去。」

〔義剛同。〕

※楠本本は、本条を巻一一五（一五六六頁）に収める。

（校1）楠本本は「問」を「淳問」作る。

（校2）楠本本は「教誨」を「先生教誨」に作る。

（校3）楠本本は「攤」を「捺」に作る。

（校4）楠本本は「方」を「亦」に作る。

（1）前夜承教誨、不可先討見天理　　巻一一七・46条（二八二二五頁）参照。

（2）只先去理會那一、不去理會那貫　　「一」、「貫」は『論語』里仁「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯」を踏まる。後の「我這道理（曾子便理會得）も同様。

## 【一一七・48】

私（陳淳）が質問状をお見せすると、先生は読み終わつて仰つた。

朱子「大体まあよいが、相変わらずだな。」「黃義剛の記録「朱子「最後の（孟子の）「自反」の解釈で「大いにして之を化す」（という聖人の境地）を持ち出しているのはどういう意味かね。何ゆえこうも曖昧なのだ。」

朱子「君が道理を説くと、尖端の刺戟的なものばかりを選び出し、挙げ句の果てにはすぐさま「大いにして之を化す」（という聖人の境地）へと到ろうとする。途中にある数々の問題については、どれも瑣事と見做して取り組もうとしない。あたかも鋭利な刃物でズバッと截断し、途中の段階を全く省みないようなもので、これは大きな欠点だ。」

淳有問目段子（校1）、先生讀畢、曰「大概説得也好、只是一樣意思。」「義剛錄云「先生曰、末梢自反（1）之説、說大而化之（2）做甚麼。何故恁地纏侗（校2）。」」又曰「公（校3）說道理、只要（校4）撮那頭一段尖底、末梢便要到那大而化之（2）極處、中間許多都把做渣滓（校5）、不要理會（校6）（3）。相似把箇利刃（校7）截斷、中間都不用了、這箇便是大病。」

※楠本本は、本条冒頭から「相似把箇利刃截斷」までを一条として卷一一五（一五六六頁）に收め、以下を欠く。

（校1） 楠本本は「段子」の後ろに「抨呈」が入る。

（校2） 楠本本は「義剛錄云「何故恁地纏侗」の小字注を欠く。

（校3） 楠本本は「公」を「所」に作る。

（校4） 楠本本は「要」を欠く。

（校5） 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「渣滓」を「渣滓」に作る。

(校6) 楠本本は「不要理會」を欠く。

(校7) 楠本本は「刃」を「刀」に作る。

(1) 自反 『孟子』公孫丑上「昔者曾子謂子襄曰、子好勇乎。吾嘗聞大勇於夫子矣。自反而不縮、雖褐寬博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣」、離婁下「有人於此、其待我以橫逆、則君子必自反也。我必不仁也、必無禮也、此物奚宜至哉。其自反而仁矣、自反而有禮矣、其橫逆由是也、君子必自反也、我必不忠。自反而忠、其橫逆由是也、君子曰、此亦妄人也已矣」。

(2) 大而化之 『孟子』尽心下「可欲之謂善、有諸己之謂信。充實之謂美、充實而有光輝之謂大。大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神」。『集注』は「大而能化、使其大者泯然無復可見之迹、則不思不勉、從容中道、而非人力之所能爲矣」と解す。

(3) 摄那頭一段尖底「不要理會」について、本巻43条(二二八二〇頁)では「若都掉了、只管說與點、正如喫饅頭、只撮箇尖處、不喫下面餡子、許多滋味都不見」と、曾点の件ばかり論じることを指し、それを饅頭の先端部だけ食べることに譬えている。また、本巻51条(二二八二九頁)にも「近日陸子靜門人寄得數篇詩來、只將顏淵曾點數件事重疊說、其他詩書禮樂都不說。如吾友下學、也只是揀那尖利底說、粗鈍底都掉了。今日下學、明日便要上達」とあり、巻四九・39条(二二〇七頁)には「今教小兒、若不匡、不直、不輔、不翼、便要振德、只是撮那尖利底教人、非教人之法」とある。本条でもこの後、曾点らの問題に言及する。いざれも顏淵、曾点らの上達の境地など、高遠な問題ばかり論じたがり、着実な下学を疎かにする傾向を指すものである。また「中間許多都把做渣滓、不要理會」に

ついては、本巻52条（二八三一頁）にも「若只守箇些子、捉定在那裏、把許多都做閑事、便都無事了」とある（以上、いずれも本条と同じく陳淳に対する訓戒）。

曾点や漆雕開については、彼らに努力の跡は見えないが、當時どのようにしてこの道理を窺い知ったのだろうか。とは言え、両者の中では、漆雕開は努力しようとしている。（『論語』に見える漆雕開の言葉）「吾斯れを之れ未だ信ずる能わざ」の「斯れ」とは、彼が捉えたものであり、「未だ信ずる能わざ」というのが、彼の努力のところなのだ。曾点にも努力をした時があるのだろうが、定かには分からぬ。或いは天賦の才が抜群であったからこそ、この道理を窺い知り得たのかもしれないが、それも分からぬ。だがそうであつたとしても、頭を低くし、多くの人たちと同じように（『中庸』に所謂）「博く学び、審らかに問い、慎しんで思い、明らかに弁じ、篤く行う」ことに取り組まねばならぬ、そうして自らの身にぴつたりと張り付くようになつてこそ実なのであり、実際に確かめてこそ穩当なのであつて、空虚に実の伴わないものを捉えてお終いということではない。「博学」「審問」等の五つの修養は、終始彼を離れることはなかつた。ただ、悟つた後は何の苦労もなく無意識のうちに実践できていたといふことだ。曾子などは、平生極めて緻密に努力をしたが、それでも日々「三省」したのは（人に対して）「忠」であつたかどうか、（朋友との交際で）「信」であつたかどうか、伝授されたことを身につけたかどうかといふことに過ぎない。一体いつ「一貫」の境地について語つただろう。『礼記』の曾子問篇では、いずれも喪祭に於ける変札（状況に応じて変化させる礼）

の仔細を訊ねている。おそらく経礼（恒常的で不变の礼）については夫子が普段から語つていて、曾子は一つ一つすべて理解していたのだろう。変礼についてはまだ言及がなかつたからこそ、逐一訊ねる必要があるのだろう。「一貫」の教えは、夫子はたまたまその時彼に気づかせようとしたに過ぎない。そういうことは、たとえすぐに理解できなかつたとしても、しばらく置いておいても支障はなく、後日もう一度喚起するだけのことだ。それを曾子がすぐさま理解できたということだけのこと、まさかひたすら彼に「一貫」を言い聞かせたりはすまい。『論語』の数多くの言葉の中で、このことに言及しているのは数ヵ所に過ぎない。孟子のいう「自得」の説も、やはりその箇所だけの言葉で、決して全篇そのことを言つてはいるのではない。いま漠然と何か一つのものを話題にして捉えられないと、ただ「一」を求めるばかりで「貫」を疎かにしてしまふ、「貫」から「一」へ到ろうとしないのは、ばら錢そのものに目もくれず、ひたすら紐を探ってきて（錢に）通そうとするようなものだ。それでよければ、『中庸』は（首章冒頭の）「天命を之れ性と謂う」の一句と（最終章末尾の）「無声無臭、至れり」の一句とがあればそれでよいことになつてしまふ、その間にあら數々の「達孝」や「達徳」、「九經」などは、どれも本質的ではない粗雑な事跡に過ぎず不要であり、一々面倒で取り組んではいけないということになつてしまふ。「礼儀三百、威儀三千」というのも、一つの道理ですべて包み込もうとして、途中にある数々の項目は取り組む必要はないということになつてしまふ。そうではなく、その書物を冒頭から虚心に読み、数々の訓詁・名物・度数などについて、一つずつ取り組んでいかなければならぬ。礼儀は一つ二つ三つ四つと数えて三百に数え至ること、威儀は百二百三百から三千に数え至らなければならない。一つずつ取り組んでいって、全てがこう徹底されねばならない。もしそんな

ふうに漠然と空虚なことを続けていれば、村の道ばたで何の宗旨もない禪を説法するようなもの、滔々と教えを垂れるのも結構、後には頗も作つてもらえて、火葬すれば舍利ともなろうが、何にもなりはしない。」

朱子「一」と「貫」とは、同じ道理に過ぎない。紐に通してある一貫の錢を人に遣つても、一貫分のばら錢を遣つても、どちらも同じよう使える。まさかばら錢は錢ではないとは言うまい。」「黄義剛の記録も同じ。湯沐の記録「もし一本の錢ひもを使えば、（ばら錢でも）同じように貫くことができる。」】

曾點漆雕開不會見他做工夫處、不知當時如何被他違見（校1）這道理。然就二人之中、開却是要做工夫。吾斯之未能信（1）、斯、便是見處。未能信、便是下工夫處。曾點有時是他做工夫、但見得未定。或是他天資高後、被他瞥見得這箇物事、亦不可知。雖是恁地、也須低著頭、隨衆從博學審問慎思（校2）明辨篤行（2）底做工夫、襯貼起來方實、證驗出來方穩、不是懸空見得便了。博學、審問五者工夫、終始離他不得。只是見得後、做得不費力也。如曾子平日用工（校3）極是仔細、每日三省、只是忠信傳習底事（3）、何曾說著一貫。曾子問一篇都是問喪祭變禮微細處（4）。想經禮聖人平日已說底、都一一理會了、只是變禮未說、也須逐一問過。一貫之說、夫子只是謾提醒他。縱未便曉得、且放緩亦未緊要、待別日更一提之。只是曾子當下便曉得、何曾只管與他說。如論語中百句、未有數句說此。孟子自得之說（5）、亦只是說一番、何曾全篇如此說。今却是懸虛說一箇物事、不能得了、只要那一去貫、不要從貫去到那一。如不理會散錢、只管要去討索來穿（6）。如此、則中庸只消天命之謂性一句、及無聲無臭至矣一句（7）便了。中間許多達孝達德九經之類（8）、皆是粗迹、都掉却、不能耐煩去理會了。如禮儀三百、威儀三千（9）、只將一箇道理都包了、更不

用理會中間許多節目。今須是從頭平心讀那書、許多訓詁名物度數、一一去理會。如禮儀、須自一二三四數至於三百、威儀、須自一百二百三百數至三千（校4）。逐一理會過、都恁地通透、始得。若是（校5）只恁懸虛不已、恰似村道說無宗旨底禪樣、瀾翻（10）地說去也得、將來也解做頌、燒時也有舍利、只是不濟得事。」又曰「一底與貫底、都只是一箇道理。如將一貫已穿底錢與人、及將一貫散錢與人、只是一般、都用得、不成道那散底不是錢。」〔義剛同。泳錄云、如用一條錢貫一齊穿了。〕

（校1）朝鮮整版は「違見」を「綽見」に作る。

（校2）正中書局本は「慎思」を「謹思」に作る。

（校3）正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「工」を「功」に作る。

（校4）正中書局本・朝鮮整版は「至三千」を「至於三千」に作る。

（校5）正中書局本・朝鮮整版は「是」を欠く。

（1）吾斯之未能信 『論語』公冶長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說」。『集注』は「斯、指此理而言。信、謂真知其如此、而無毫髮之疑也。開自言未能如此、未可以治人、故夫子說其篤志」と解す。

（2）博學審問慎思明辨篤行 『中庸』（章句二〇章）。

（3）每日三省、只是忠信傳習底事 『論語』學而「曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」。

(4) 曾子問一篇都是問喪祭變禮微細處　卷二七・46章(六七九頁)にも、曾子と「一貫」、『礼記』曾子問篇をめぐつて「如曾子是於聖人一言一行上一一踐履、都子細理會過了、不是默然而得之。觀曾子問中間喪禮之變、曲折無不詳盡、便可見曾子當時功夫是一一理會過來。聖人知曾子許多道理都理會得、便以一貫語之、教它知許多道理卻只是一箇道理。曾子到此、亦是它踐履處都理會過了、一旦豁然知此是一箇道理、遂應曰、唯」とある。『礼記』と変礼、および後出の經礼については、卷八五・6条(二一九四頁)に「禮有經、有變。經者、常也。變者、常之變也。……先儒以儀禮爲經禮。然儀禮中亦自有變、變禮中又自有經、不可一律看也。禮記、聖人說禮及學者問答處、多是說禮之變」とある。

(5) 孟子自得之説　『孟子』離婁下「君子深造之以道、欲其自得之也。自得之、則居之安、居之安、則資之深、資之深、則取之左右逢其原、故君子欲其自得之也」。卷二七・52条(六八三頁)「江西學者偏要說甚自得、說甚一貫」。

(6) 如不理會散錢、只管要去討索來穿　本卷44条(二八二二頁)にも同様の表現が見える。卷二七・53条(六八四頁)「吾道一以貫之、譬如聚得散錢已多、將一條索來一串穿了。所謂一貫、須是聚箇散錢多、然後這索亦易得。若不積得許多錢、空有一條索、把甚麼來穿。吾儒且要去積錢。若江西學者都無一錢、只有一條索、不知把甚麼來穿」。

(7) 天命之謂性一句、及無聲無臭至矣一句　『中庸』の冒頭(章句一章)と末尾(章句三三章)の句

(8) 達孝達德九經之類　『中庸』(章句一九章)「武王、周公、其達孝矣乎。夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也」、(章句二〇章)「知仁勇三者、天下之達德也」、「凡爲天下國家有九經。曰、修身也、尊

賢也、親親也、敬大臣也、體群臣也、子庶民也、來百工也、柔遠人也、懷諸侯也」。

(9) 禮儀三百、威儀三千 『中庸』(章句二七章)。

(10) 澜翻 (言辭が) 沿々として止まることがない、(文章が) 勢いがあつて奔放。卷六四・141条(一五六六頁)「某嘗説、陸子靜説道理有箇黑腰子。其初説得瀾翻、極是好聽、少間到那緊要時、又却藏了不説、又別尋一箇頭緒瀾翻起來」、卷一三九・128条(一三三二二頁)「東坡雖是宏闊瀾翻、成大片滾將去、他裏面自有法」。

(47) 48条担当 阿部 光麿)

【一一七・49】

気が弱く胆が小さいという欠点についてお尋ねした。

朱子「とにかく学問の努力を続けなさい。道理が明かになれば気は自ずと強くなり、胆も自ずと大きくなる。」

問氣弱膽小之病。曰「公只去做功夫、到理明而氣自強、而膽自大矣。」

※本条は楠木本の「訓門人」には収められていない。

## 【一一七・50】

質問「物事にはそれぞれ理があり、理にはそれぞれ十分に至当のところがあります。いま私は七八分まで理解し、七八分の處まで実践できているだけで、その上の数分を欠いております。繰り返し理を窮め、ずっと実践してゆけば、久しくして熟し、自ずと進歩して十分にまで到ることができるのでしょうか。」

朱子「まだゆつたりと落ち着いて取り組めなくとも、熟すれば自ずとゆつたりと落ち着くようになる。」「熟」の一字を何度も詠じられた。

問「事各有理、而理各有至當十分處。今看得七八分、只做到七八分處、上面欠了分數。莫是窮來窮去、做來做去、久而且熟、自能長進到十分否。」曰「雖未能從容、只是熟後便自會從容。」再三詠一熟字。

※楠本本は本条を巻一一五（一五八六頁）に収める。

## 【一一七・51】

門人たちが席に控え、坐が定ると、先生は私（陳淳）を見て、前回と同じことを重ねておっしゃた。

朱子「それしきの道理をひたすらそうやつてじつと守り続けていては、山林で苦行するのと同じようなもの、すぐに何もできなくなってしまう。何が「大業に潜心す」だ。」

陳淳「自らの欠点はわかつております。おおよそ「下学」の努力が足らないのです。」

朱子「このあいだ陸子静（九淵）の門人が詩數篇を送つてきたが、ただ顔淵や曾点のいくつかのことを繰り返し言うばかりで、その他の詩書礼樂については何ら触れていなかつた。君たちのいう「下学」も、やはりそういう尖鋭的などころばかりを選んで言つだけで、卑近でありふれたことはすべて欠いてしまい、今日「下学」に努めたならば、明日にはもう「上達」の境地に到ろうというようなものだ。『孟子』でいえば、

梁惠王篇以下は全く読まずに、告子篇と尽心篇だけを選んで論じ、この二篇だけを用いて、他の五篇はみな削つてしまふようなものだ。緊要なところは読むが、そうでないところは読まない。本質的な問題は考えるが、卑近な問題は取り組まない。書物というのは、あるがままに読むべきものなのだ。そんなふうに選んではならない。『論語』二十篇でいえば、例の曾点の境地ばかりを選んで玩味し、それで全てをおおい尽くそうとしてしまう。「舞雩に風し、詠じて歸らん」というだけでは、四季の風景を述べたに過ぎない。それで済めば、どうして『論語』にはあんなにたくさんのが述べられているのか。先日、江西の友人が来て、（孔門の）「楽しみ」の境地を尋ね求めるべきかと質問したので、私はこう言つた。「ただ自分で尋ね求めていつて、極めて苦しいところに尋ね到つたならば、それこそが良い兆候だ。人は気持ちの良くないところに尋ね到つてこそ、その時に楽しみの気持ちが出て来るものだ。何の努力もせずに自然に楽しむという道理はない。」いま学問修養を行うには、ただあたりまえに取組んでゆけばよく、殊更のものと見てはならぬ

い。粗なるものは粗なるものなりに取組み、細なるものは細なるものなりに取組めばよく、選り好みしてはいけない。『論語』『孟子』ですらそうやつて選り好みしているようでは、史書だの世間の粗雑な書物だのは、どうやって読むのだね。」 「義剛の記録も同じ。」

諸友入侍、坐定。先生目淳、申前説曰「若把這些子道理只管守定在這裏、則相似山林苦行一般、便都無事可做了、所謂潛心大業（1）者何有哉。」淳曰「已知病痛、大段欠了下學（2）工夫。」曰（校1）「近日陸子靜門人寄得數篇詩來、只將顏淵曾點數件事重疊說、其他詩書禮樂都不說。如吾友下學、也只（校2）是揀那尖利底說、粗鈍底都掉了。今日下學、明日便要上達（2）。如孟子、從梁惠王以下都不讀、只揀告子盡心來說、只消此兩篇、其他五篇都刪了。緊要使讀、閑（校3）慢底便不讀。精底便理會、粗底便不理會。書自是要讀、恁地揀擇不得。如論語二十篇、只揀那曾點底意思來涵泳、都要蓋了。單單說箇風乎舞雩、詠而歸（3）、只做箇四時景致（校4）（4）、論語何用說許多事。前日江西朋友來問、要尋箇樂（5）處。某說、只是自去尋、尋到那極苦澁處、便是好消息（6）。人須是尋到那意思不好處、這便是樂底意思來、却無不做工夫自然樂底道理。而今做工夫、只是平常恁地去理會、不要把做差異（7）看了。粗底做粗底理會、細底做細底理會、不消得揀擇。論語孟子恁地揀擇了、史書及世間粗底書、如何地看得。」 「義剛同。」

※楠本本は本条を巻一一五（一五六六頁）に収め、「前日江西朋友來問」以下を欠く。

（校1）楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校2) 楠本本は「只」を欠く。

(校3) 朝鮮整版は「閑」を「間」に作る。

(校4) 楠本本は「致」を「底」に作る。

(1) 潛心大業 『漢書』董仲舒伝の劉歆の贊「仲舒遭漢承秦滅學之後、六經離析、下帷發憤、潛心大業、令後學者有所統壹、爲羣儒首」。『北漢大全集』「似學之辨」「或曰、今世所謂科舉之學、與聖賢之學何如。曰、似學而非學也。：蓋其徒知舉子蹊逕之爲美、而不知聖門堂宇高明廣大之爲可樂、徒知取青紫伎倆之爲美、而不知潛心大業趣味無窮之爲可嗜」。

(2) 下學／上達 『論語』憲問「不怨天、不尤人、下學而上達。」

(3) 風乎舞雩、詠而歸 『論語』先進、曾点の語。

(4) 景致 風景、景色、狀況。卷四〇・9条(一〇二六頁)「曾點是見他箇道理大原了、只就眼前景致上說將去」。

(5) 樂 孔子、及び顏回・曾点が「樂」しんだ境地。『論語』雍也「子曰、賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其樂」。卷四〇・10条(一〇二六頁)「曾點見得事事物物上皆是天理流行。良辰美景、與幾箇好朋友行樂。：他看見日用之間、莫非天理、在在處處、莫非可樂。他自見得那春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂水、風乎舞雩、詠而歸處、此是可樂天理」、同・25条(一〇二九頁)「問、曾點浴沂氣象、與顏子樂底意思相近否。曰、顏子底較恬靜、無許多事。曾點是自恁說、却也好、若不已、便成釋老去、所以孟子謂之狂。顏子是孔子稱他樂、他不會自說道我樂。大凡人自說樂

時、便已不是樂了」。

(6) 好消息　よい状況、よい徵候。『文集』卷五九「答趙恭父」第四書「今已是不得已而從官、唯有韜晦靜默勿太近前爲可免於斯世耳。一或不幸爲人所知、便不是好消息也」。

(7) 差異　奇異なる、奇怪な。卷六二・18条(一四八三頁)「中則直上直下、庸是平常不差異」、卷九・42条(一五四頁)「這箇道理、與生俱生。今人只安頓放那空處、都不理會、浮生浪老、也甚可惜。要之、理會出來、亦不是差異底事」。

(49) 51条担当 小池直

## 【一一七・52】

門人たちが挨拶をして退出すると、先生は私(陳淳)一人を引き留めておつしやつた。

朱子「どうして何も質問しないのだ。」

陳淳「この数日間、先生のお教えをたまわり、すでに大意は納得しました。帰郷してから修養あるのみです。」

朱子「この度の別れは、きっと再会できないだろう。」

陳淳「おのれ自身のことについては、すでに理解いたしました。ただ変則的な事態への対応について、さらにご教示をたまわりたく存じます。」

朱子「先ずは恒常的なことを理解すべきで、変則的なことを考える必要はない。恒常的であたりまえの多くの道理をまだ十分理解してもいいのに、どうしていきなり変則的なことに取り組もうとするのだ。聖賢の言葉には、多くの道理が分かり易く並べられている。先ずは心をゆつたりと広くし、虚心に読む」とだ。あたりまえの道理に通曉したならば、おのずと変則的なことにも対応できるようになる。何か一つのものにかたくなに固執して、何がなんでも恒常的なものを求めるべきだとか、変則的なものを求めるべきだというのではない。

諸友揖退（校1）、先生留淳獨語、曰「何故無所問難。」淳曰「數日承先生教誨、已領大意、但當歸去作工夫。」曰「此別（1）定不再相見。」淳問曰「己分上事已理會、但應變處更望提誨。」曰「今且當理會常、未要理會變。常底許多道理未能理會得盡、如何便要理會變。聖賢說話（校2）、許多道理平鋪在那裏、且要闊著心胸平去看、通透後自能應變。不是硬捉定一物、便要討常、便要討變。」

※楠本本は、本条を七つの条に分けて、卷一一五（一五六七頁）に収める。

（校1）楠本本は「退」を欠く。

（校2）楠本本は「話」を欠く。

（1）此別 陳淳の師事年代は、紹熙元年（一一九〇）一一月より翌（一一九一）五月、及び慶元五年（一九九）一月より翌（一一〇〇）一月。本条は、後者の時期の記録であろう。

いま僧侶の行脚のように、四方の賢者と交流し、四方の事情を観察し、山川の形勢を見、古今の興亡・治乱・得失の跡を観てこそ、道理の見方があまねく行き渡る。（『論語』にいうように）「士にして居（安樂）を懷うは、以て士たるに足らず」だ。じつと部屋の中でかたくなに何かを守つて、門を閉ざして独り坐つていればそれでよし、それで聖賢になれるなどということはない。昔から世事に疎い聖賢などいないし、事変に通じていない聖賢もいない。まして門を閉ざして独りで坐つている聖賢などいやしない。

今也須如僧家行脚、接四方之（校1）賢士、察四方之事情、覽山川之形勢、觀古今興亡治亂得失之迹、這道理方見得周徧。士而懷居、不足以爲士矣（1）。不是塊然守定這物事在一室、關門獨坐便了、便可以爲聖賢。自古無不曉事情底聖賢、亦無不通變底聖賢、亦無關門獨（校2）坐底聖賢。

（校1）楠本本は「之」を欠く。

（校2）楠本本は「獨」を欠く。

（1）士而懷居、不足以爲士矣。『論語』憲問。『集注』「居、謂意所便安處也」。卷二九・101条（七五〇頁）「子路是有些戰國俠士氣象、學者亦須如子路恁地割捨得。士而懷居、不足以爲士矣。若今人恁地畏首畏尾、瞻前顧後、粘手惹脚、如何做得事成。恁地莫道做好人不成、便做惡人也不成」。

聖賢はあらゆるもの」とに通じていて、できなことはなく、どんなことにも取り組み理解できたのだ。

『中庸』に「天下國家に九經あり」とあるように、多くの物事に取り組まなくてはならない。たとえば武王は箕子を訪れ、箕子は「洪範」を述べたが、（その「洪範」の内容は）自身の視・聴・言・貌・思から、果ては天ととの関係にまで及ぶものであった。人事には八つの政<sup>まつりご</sup>があり、天の時には五つの紀<sup>のり</sup>があり、（疑わしいことは）ト筮によつて考へ、もろもろの兆候によつて驗証するといったように、「洪範」に備わつてない事項などない。またたとえば『周礼』という一書の中には、周公が国を治めた多くの制度が記載されているが、我々のどこの天下国家のことを自分の問題として考へる者がいようか。ただ、こういつた古の多くの聖賢のたちの全体像についても、おおまかに知つておかなければならぬ。つまり、道理といふものは、あらゆるところに該当し、あらゆるところに存在するのだ。礼・樂・射・御・書・数や、あまたの繁雑な立ち居振る舞い、礼儀作法の細則のどこに靈妙精緻な道理があるだろうか。それでもそういつたことも理解しなければならないのだ。理解が熟した時には、道理が浮かび上がつてくる。また律曆や刑法、天文地理や軍隊、官職といった類も、みな考へなければならぬ。たとえその微細なところにまで通曉できなくとも、全体像さえ分かれば、道理はあまねく行き渡る。それを、ただ幾ばくかのことをじつと守つて凝り固まり、他の多くのことをどうでもよいことと見なしてしまつていては、何にもなりはしない。それでは、家の中のことしか対処できず、門の外のことはどうにもならなくなつてしまふ。

聖賢無所不通、無所不能、那箇事理會不得。如中庸天下國家有九經（1）、便要理會許多物事。如武王訪箕子陳洪範（2）、自身之視聽言貌思（3）、極至於天人之際、以人事則有八政（4）、以天時則有五紀（5）、稽之於卜筮（6）、驗之於庶徵（校1）（7）、無所不備。如周禮一部書、載周公許多經國制度、那裏便有國家當自家做（8）。只是古聖賢許多規模、大體也要識。蓋這道理無所不該、無所不在。且如禮樂射御書數（9）、許多周旋升降文章品節（10）之繁、豈有妙道精義在。只是也要理會。理會得熟時、道理便在上面。又如律曆刑法天文地理軍旅官職之類、都要理會。雖未能洞究其精微、然也要識箇規模大概、道理方浹洽通透。若只守箇些子、捉定在那裏（校2）、把許多都做閑（校3）事、便都無事了。如此、只理會得門內事、門外事便了不得。

（校1）楠本本・朝鮮整版は「庶徵」を「庶證」に作る。

（校2）楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「那裏」を「這裏」に作る。

（校3）朝鮮整版は「閑」を「閒」に作る。

（1）天下國家有九經  
『中庸』（章句二〇章）「凡爲天下國家有九經。曰、修身也、尊賢也、親親也、敬大臣也、體群臣也、子庶民也、來百工也、柔遠人也、懷諸侯也。」

（2）武王訪箕子陳洪範  
『尚書』洪範「惟十有三祀、王訪于箕子。王乃言曰、嗚呼、箕子。惟天陰隲下民、相協厥居、我不知其彝倫攸敘。」

(3) 身之視聽言貌思 『尚書』洪範「二、五事。一曰貌、二曰言、三曰視、四曰聽、五曰思。貌曰恭、言曰從、視曰明、聽曰聰、思曰睿。恭作肅、從作乂、明作哲、聰作謀、睿作聖」。

(4) 人事則有八政 『尚書』洪範「三、八政。一曰食、二曰貨、三曰祀、四曰司空、五曰司徒、六曰司寇、七曰賓、八曰師」。

(5) 天時則有五紀 『尚書』洪範「四、五紀。一曰歲、二曰月、三曰日、四曰星辰、五曰歷數」。

(6) 稽之於卜筮 『尚書』洪範「七、稽疑。擇建立卜筮人、乃命卜筮。日雨、日暘、日燠、日蒙、日驛、日克、日貞、日悔」。

(7) 驗之於庶徵 『尚書』洪範「八、庶徵。日雨、日暘、日燠、日寒、日風、日時。五者來備、各以其敘、庶草蕃庶」。

(8) 那裏便有國家當自家做 訳文は、下文「只是古聖賢許多規模、大體也要識」とのつながりを考えて「那裏」を「どこに（反語）」の意味にとった。『考文解義』には「那、何也。謂自家雖無做得國家之事、要須先識治法大概也」とある。「那裏」を「そこ」の意味に解釈すれば、「そこ（＝『周禮』の中）には国家のことを自分のこととして引き受ける姿勢がある」の意味か。

(9) 禮樂射御書數 いわゆる六芸。『周禮』大司徒「以鄉三物教萬民而賓興之。一曰六德、知仁聖義忠和。二曰六行、孝友睦姻任恤。三曰六藝、禮樂射御書數」。

(10) 周旋升降文章品節 『禮記』樂記「簾幕俎豆、制度文章、禮之器也。升降上下、周還裼襲、禮之文也」。

だから聖人は、人に「博学」「この二字を声を強めて言われた。」の必要性を教えたのだ。『中庸』にあるように、「博く之<sup>これ</sup>を学び、審らかに之を問い合わせ、慎みて之を思ひ、明らかに之を弁じ、篤く之を行」わなければならぬ。(『論語』に)「子曰く、我は生まれながらにして之を知る者に非ず。古を好み敏にして以て之を求むる者なり」とあるように、(『中庸』に)「文武之道、布<sup>レ</sup>きて方冊に在り(文献に残されている)」とあるように、(『論語』に)「(文武の道は未だ地に墜ちず)人在り、賢者は其の大なる者を識り、不賢者は其の小なる者を識る。夫子は焉<sup>いづ</sup>くにか学ばざらん。而して亦た何の常師か之れ有らん」とあるように、聖人は「生まれながらにして知る」存在ではあつたが、それでも一つ一つの事柄に取り組み理解していくのであり、一つとして明らかにしないものはなかつたのだ。

所以(校1)聖人教人要博學「二字力説」。須是博學之、審問之、慎(校2)思之、明辨之、篤行之(1)。子曰、我非生而知之者、好古敏以(校3)求之者也(2)。文武之道、布在方冊(3)、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者。夫子焉不學。而亦何常師之有(4)。聖人雖是生知、然也事事理會過、無一之不講。

(校1) 楠本本は「所以」を欠く。

(校2) 楠本本は「慎」を「謹」に作る。

(校3) 楠本本は「以」を「而」に作る。

(1) 博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之

『中庸』(章句二〇章)。

(2) 子曰、我非生而知之者、好古敏以求之者也

『論語』述而。

(3) 文武之道、布在方冊

『中庸』(章句二〇章)「哀公問政。子曰、文武之政、布在方策。其人存、

則其政舉。其人亡、則其政息」。

(4) 在人ㄩ而亦何常師之有

『論語』子張「衛公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道、未墜

於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學。而亦何常師之有」。

道理というものは、ただ一つの事柄について理解すればよいというものではない。学ぶときには何でも学び、取り組むときには一つ一つ取り組んでいくのだ。およそ物事というものは、詳細にまで理解が及ばなくとも、大要のところがあるものだ。たとえ詳細なところまで通曉できなくても、大要のところならば自分で分かることは、必ずしも可能だ。いま君はただ一本の線の上だけで天理を窺い見ては、すぐさま天理はこのようなものだといい、すぐさまそれで万事に通貫させようとする。どうしてそんなことができようか。(程子は)「あまたの物をあつめてこそ、神妙なる造化の働きが分かる。多くの材料を集めてこそ、家屋の作り方が分かる。一つの事柄、一つの道理だけから、聖人の心を窺い知ろうとするのは、上智の者でなければできないことだ」と言つている。心をすつきり開いて取り組みなさい。

這道理不是只就一件事上理會見得便了。學時無所不學、理會時却是逐件上理會去。凡事雖未理會得詳密、亦有箇大要處。縱詳密處未曉得、而大要處已被自家見了（1）。今公只就一線上窺見天理、便說天理只恁地樣子（校1）、便要去通那萬事、不知如何得。萃百物、然後觀化工之神。聚衆材、然後知作室之用。於一事一義上、欲窺聖人之用心、非上智不能也（2）。須撤開心胸去理會。

（校1）楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「様子」を「了」に作る。

（1）被自家見了　こここの「被」字の意味未詳。同様の例が次の二条にも見える。卷一一六・54条（二八〇五頁）「若今日讀不得、明日又讀。明日得不得、後日又讀、須被自家讀得」、卷五九・71条（一三九四頁）「恰似使錢相似、日間使百錢、使去九十錢、留得這十錢這裏。第二日百錢中使去九十錢、又積得二十錢。第三日如此、又積得三十錢。積來積去、被自家積得多了、人家便從容」。また、次のような「被」も同様の用例か。卷一一七・46条（二八二六頁）「曾點不知是如何、合下便被他綽見得這箇物事」。

（2）萃百物、然後觀化工之神、非上智不能也  
『程氏文集』卷四・春秋伝序（五八四頁）、また『近思錄』卷三・格物窮理にも収める。

天理は大きく、その包むところも大きい。たとえば五常の教えは、自分の家についていえば、父子・夫

婦・兄弟があるだけだが、一たび外に出るや朋友があり、朋友関係の中にも数知れない事柄がある。官職に就くと、君臣の分が定まるが、ここにもまた非常にたくさん的事柄があり、その一々の事柄全てを明らかにしていかなくてはならない。学問修養に努めてもいらない他の者たちには、こういったことを言いはしない。君はおのれ自身のことについてすでに分かっているのだから、もし君に言つてやらなければ、惜しいと思うのだ。他の者たちが、おのれ自身のことについて何ら分かっていないくせに、漫然と様々な事に目を向けているのは、もちろんよくない。しかし、すでに根本が分かっているので、それだけをとらえておけばよいと考えるのもよくない。いまひたすら「敬」を保ち、身心をひきしめ、日常において道理に沿つて、過失がないようにしようというのは、もちろんよいことだ。けれども、外に出て世の中のことに対応すると、このことに対応できている時には、他のことには対応できないものだ。

天理大、所包得亦大。且如五常之教、自家而言、只有箇父子夫婦兄弟。才出外、便有朋友、朋友之中、事已繁多。及身有一官、君臣之分便定、這裏面又繁多事、事事都合講過。他人未做工夫底、亦不敢向他說。如吾友於己分上已自見得、若不說與公、又可惜了。他人於己分上不會見得（校1）、泛而觀萬事、固是不得。而今已有箇本領、却（校2）只捉定這些子便了、也不得。如今只道是持敬、收拾身心、日用要合道理無差失、此固是好。然出而應天下事（校3）、應這事得時、應那事又不得。

（校1）楠本本は「得」を欠く。

(校2) 楠本本は「却」を欠く。

(校3) 楠本本は「應天下事」を欠く。

学問の根本は、『中庸』や『大學』にすでに言い尽くされている。『大學』の冒頭には、「格物致知」が説かれているが、なぜ「格物致知」が求められるのだろうか。つまり、「格」<sup>いた</sup>らないところがなく、「知」らないところがなくならなければならないということだ。「物格り、知至」<sup>いた</sup>ることで、はじめて「意誠に、心正しく、身修ま」るのであり、さらにこれらを押し広げていくと「家齊いたい」、國治まり、「天下平らか」となり、自ずとどんどんと進んでいき、そこには何ら滞りがない。」「黄義剛の記録も同じ。」

學之大本、中庸大學已説盡了。大學首便説格物致知（1）。爲甚要格物致知。便是要無所不格、無所不知。物格知至、方能意誠心正身修、推而至於家齊國治天下平、自然滔滔去、都無障礙。〔義剛同。〕（校1）

（校1）楠本本は末尾の小字注を欠く。

（1）格物致知　『大學』（章句經一章）「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、身修而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平」。

（52条担当　中嶋諒）

【一一七・53】

陳淳 「（）教誨を賜り、「下学」の努力を大きく欠いていることを深く自覚いたしました。しかしながら、遠い片田舎で師友もなく寡聞に打ち過ぎますと、誤まちや迷いを招きやすく、それを正す術もありません。どうか「下学」についてもう少しお教えを賜り、日々の拠り所とさせて下さい。」

朱子 「誤った時のことを予め探つておく必要はない。誤ったその時点で、その都度考えればよいのだ。「下学」というのは視野を広げて幅広く何事にも取り組んでいくこと、一隅に縮こまつてじつとしていては、狭苦しくなってしまう。あちこちに出向いて遊学してまわり、こっちの友人のところに二、三ヶ月逗留してどのようにであるかを見、あっちの友人のところに二、三ヶ月逗留してどのようにであるかを見るようにせねばならない。」

胡叔器（安之）「あちこちに遊学するのはもちろんよろしいでしようが、そのつど人に流されてしまうのではないでしようか。」

朱子 「それは自分次第だ。「黄義剛の記録、胡叔器（安之）」「よくない人に駄目にされてしまうのではないでしようか。」朱子「まずその人がどのような人かを知らねばならない。実際に会つてその人と一緒にいれば、数日で分かるだろう。もし合わなければ立ち去るまでだ。」」合わなければ立ち去るまでだ。そのように人に流されてしまうようでは、いつそ家に引きこもって独り寡聞に打ち過ごす方がましだ。」「黄義剛の

記録も同じ。」

淳稟曰「伏承教誨、深覺大欠下學（1）工夫。恐遐陬僻郡、孤陋寡聞、易致差迷、無從就正。望賜下學說一段、以爲朝夕取準。」曰（校1）「而今也不要先討差處、待到那差地頭（2）、便旋旋理會。下學只是放閑去做、局促在那一隅、便窄狹了。須出四方游學一遭、這朋友處相聚三兩月日、看如何。又那朋友處相聚三兩月日、看如何。」胡叔器（校2）曰「游學四方固好、恐又隨人轉了。」曰「要我作甚。」〔義剛錄云、胡叔器曰「恐又被不好底人壞了。」先生曰「我須是先知得他是甚麼樣人。及見後與他相處數日、便見。若是不合、便去。」不合便去。若恁地（校3）隨人轉、又不如只（校4）在屋裏孤陋寡聞。」〔義剛同（校5）。〕

※楠本本は本条を巻一一五（一五八八頁）に収める。

（校1）楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

（校2）楠本本は「胡叔器」を「胡」に作る。

（校3）楠本本は「恁地」を欠く。

（校4）楠本本は「只」を欠く。

（校5）楠本本は「義剛同」の小字注を欠き、以下の小字注が入る。「按黃義剛錄少異、今附云、陳安卿下學說有恐差了之語。先生曰、也不須說、而今也不要先計那差處、待到地頭旋旋理會下學、只是放閑去做局促去那一段、便窄狹了。須是出四方游一遭這朋友處相聚三兩月日看如何。又那朋友處三兩月日看如

何。恁地便見。胡叔器曰、遊學固好。恐又被不好底人壞了。先生曰、我須是先知 得他是甚麼樣人、及見後不與他相處、數月便見。若是不合、便去。若恁地隨人轉、又不如只在屋 裏孤陋寡聞」。

(1) 下學 『論語』憲問。卷一一七・51条(二八二九頁)「淳曰、已知病痛、大段欠了下學工夫」。

(2) 地頭 段階、地点、時点、方面、場所。卷八・12条(一三〇頁)「這箇道理、各自有地頭、不可只就一面說」、卷七・10条(一二五頁)「只據而今當地頭立定脚做去、補填前日欠闕」。

### 【一一七・54】

先生が私(陳淳)のことと言われた。

朱子「安卿は(孟子の所謂)「天下の善士を友として未だ足らずと為し、又たかみ尚つかた古の人を論ず」というようでなければいけない。もつと心を開いて視野を広くしてこそ伸びてゆけるのだ。そんなふうにしているだけでは、十全を尽くせまい。」

先生謂(校1)淳曰「安卿須是友天下之善士爲未足、又尚論古之人(1)。須是開闊(2)、方始展拓(3)。若只如此、恐也不解十分。」

※楠本本は本条を卷一一五(一五八九頁)に収める。

(校1) 底本は「問」に作るが、楠原本・正中書局本・朝鮮整版により「謂」に改める。

(1) 友天下之善士爲未足、又尚論古之人。『孟子』万章章句下「孟子謂萬章曰、一鄉之善士、斯友一鄉之善士、一國之善士、斯友一國之善士、天下之善士、斯友天下之善士、以友天下之善士爲未足、又尚論古之人、頌其詩、讀其書、不知其人、可乎、是以論其世也、是尚友也」。『孟子集注』「尚、上同。言進而上也。頌、誦通。論其世、論其當世行事之迹也。言既觀其言而不可以不知其爲人之實、是以又考其行也。夫能友天下之善士、其所友衆矣、猶以爲未足、又進而取於古人。是能進其取友之道、而非止爲一世之士矣」。

(2) 開闊 広々と、おおらかに、鷹揚に。卷九・66条(一五八頁)「只守著一些地、做得甚事。須用開闊看去、天下萬事都無阻礙方可」。

(3) 展拓 おし広げる、展開する、発展する、成長する。『外書』卷十二・38条(四二六頁)・『上蔡語錄』卷上・57条「明道初見謝、語人曰、此秀才展拓得開、將來可望」、卷一一七・20条(二八一二頁)「吳伯豐好箇人、近日死了、可惜。頗留意、也展拓得開。……因問、展拓得開、向來明道有此語、莫是擴充得去否。曰、適說吳伯豐、只是據他才也展拓得開」。卷一一四・18条(二七八五八頁)「先生因學者少寬舒意、曰、公讀書恁地縝密、固是好。但恁地逼截成一團、此氣象最不好、這是偏處。如一項人恁地不子細、固是不成箇道理。若一向縫密、下梢却展拓不去。明道一見顯道曰、此秀才展拓得開、下梢可望」、『上蔡語錄』卷上・32条「謝子曰、道須是下學而上達、始得。不見古人就灑掃應對上做起。曰、灑掃應對上學、却似太瑣屑不展拓。曰、凡事不必須要高遠。且從小處看」。

【一一七・55】

先生は送別の宴席で何度も酒を酌み交わし、その途中、手ずから李丈（李唐咨）に酒を勧めておつしやつた。

朱子「ここに集つてともに学ぶのもこんなところだ。後は帰郷して自らを省み、自分のこととして取り組むことだ。」

次に私（陳淳）に一杯注いで下さり、おつしやつた。

朱子「君はもつとこちらに出てくるようだ。郷里にじつとしていると、知らず知らずのうちに駄目になつてしまふ。むかし陳了翁（陳璣）がこんな話をしている。碁が非常に達者な者がおり、ある人がその者を京師に迎えて、名人について学ばせた。ところが、長らく傍らに侍つていても拘らず、名人はとんと教えることなく、ただ碁盤を持つて自分について歩かせるだけであつた。ある人がそのことを責めると、名人は言つた、「この者の碁はすでにすばらしく、高等な手はもうすべて知つている。ただ低い下世話な手はまだ知らない。私について歩かせているのは、一通りみんな経験させてやろうとしているのだ。」

先生餞席、酒五行、中筵、親酌一杯勸李丈（1）云「相聚不過如此、退去反而求之。」次一杯與淳（校1）、曰「安卿更須出來（校2）行一遭（校3）。村裏坐、不覺壞了人。昔陳了翁（2）説、一人碁甚高、或邀之

入京參國手。日久在側、並無所教、但使之隨行攜幕局而已。或人詰（校4）其故、國手曰、彼幕已精、其高著（3）已盡識之矣。但低（校5）著未會識。教之隨行、亦要都經歷一過（4）。

※楠本本は本条を巻一一五（一五八九頁）に收める。

（校1）楠本本は「與淳」の後に「起趨而前、先生力止之坐」が入る。

（校2）楠本本は「出來」の「出」を欠く。

（校3）楠本本は「行一遭」の「行」を欠く。

（校4）楠本本は「詰」を「語」に作る。

（校5）楠本本・正中書局本は「低」を「淺」に作る。

（1）李丈 45条参照。

（2）陳了翁 陳瓘（一〇五七～一一二二）。字は瑩中、号は了翁、南劍州沙県の人。『資料索引』二五

三〇頁。『宋史』巻三四五。『学案』巻三五。

（3）高著 高等な手、高級な手。「著」は碁の一手を表す量詞。

（4）昔陳了翁説、「都經歷一過 卷一二一・85条（一九四六頁）に同様の話柄が見える。「看二十五條曰、

此正與前段相反、却有上截無下截。天資高底、固有能不爲富貴所累。然下此者、亦必思所以處之。貧而樂者固勝如無誼、富而好禮者、固勝如無驕。若未能無誼無驕底、亦須且於此做工夫。頃見一文集云、有一人天資善奕、極高、遂入京見國手。國手與之下了、但云、可隨我諸處、看我與人奕。如此者半年遂遣

之。其人曰、某隨逐許時、未蒙教得有所長。國手曰、汝碁本高、但未會識低着、却恐與人下時錯了。我帶你去半年、只是欲汝識低著耳」。

## 【一一七・56】

出立に臨んで暇乞いをすると、先生はおつしやった。

朱子「君は今年はもう人に学塾のことを任せているのだから、冬には再びこちらに出てくるように。」

李丈（李唐咨）が申し上げた。

李唐咨『書解』についてはしばらく手を緩められ、願わくは『礼書』を速やかに完成されれば、万世の幸いに存じます。」

朱子『書解』は至つてたやすい。蔡三哥（蔡沈）が来さえすればそれで済む。『礼書』は全体としてはまだまだだ。」

臨行拜別、先生曰「安卿今年已許人書會（1）、冬間更須出行一遭。（校1）」李丈稟曰「書解（2）乞且放緩、願早成禮書（3）、以幸萬世。」曰（校2）「書解甚易、只等蔡三哥來便了。禮書大段未也。」（校3）

※楠本本は本条を巻一一五（一五八九頁）に収める。

(校1) 楠本本は「行一遭」の後に「不然、亦望自愛」が入る。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校3) 楠本本は末尾に「以上並淳自録。下見諸録」の小字注がある。

(1) 書會 郷村の学塾。卷一〇九・5条(二六九二頁)「曰、呂氏家塾記云、未立三舍前、太學只是一大書會、當時有孫明復胡安定之流、人如何不趨慕」。「許人書會」は、自分が主宰していた塾を人に委ね任すことか。卷八四・38条(二一九二頁)「先生有書與黃寺丞商伯云、伯量依舊在聞館否。禮書近得黃直卿與長樂一朋友在此、方得下手整頓。……直卿又許了鄉人館、未知如何。若不能留、尤覺失助。甚恨鄉時不會留得伯量相與協力。若渠今年不作書會、則煩爲道意、得其一來爲數月留、千萬幸也」。

(2) 書解 蔡元定の三男蔡沈に撰述を一任していた『書經』の注釈書『書集伝』(六卷)を指す。この問答は慶元六年(一二〇〇)正月のものと推測されるが(東景南『朱熹年譜長編』下巻、一三八四頁)、その前年の冬、朱熹は蔡沈に『書集伝』の撰述を依頼している。

(3) 禮書 『儀礼』の注釈書『儀礼經伝通解』(三七卷、統一九卷)を指す。朱熹はこの問答がなされたおよそ三ヶ月後に逝去するが、該書の完成は門弟の黃榦に託される。なお卷八四「論修禮書」(一一八五〇二二九二頁)は該書の編纂に関する問答を集めたものである。

安卿（陳淳）が質問した。

陳淳「先生が先日廖子晦（廖德明）に宛てた書簡で「道というのは何かきらきら輝くものがそこにあるのではない」とされているのは、まことにもつともなことと存じます。ただ（孔子が）「操れば則ち存し、舍すつれば則ち亡ぶ」という以上、つきつめればやはり何ものがあるのではないか」といふべきか。」

朱子「操れば存す」とは、心を引き締めてあれこれくだらないことを考えないようにするだけのこと、いつたいいつ何ものかをじつとそこにつかまえておくなどということがあつただろうか。」

陳淳「『尚書』の「諱の天の明命を顧みる」とは、結局どういうことなのでしょうか。」

朱子「それは、道理が何ものにも遮られず目前にあるということを言つているに過ぎない。（『論語』の）「立ちては則ち其の前に参するを見、輿に在りては則ち其の衡に倚るを見る」というのも、すべて理がそのようにはつきりと見えるというだけのことだ。まさか、それとは別に何ものかがそこで光り輝いているということはあるまい。」

安卿（校1）問「先生前日（校2）與廖子晦書云（1）、道不是有箇物事閃閃爍爍在那裏、固是如此。但所謂操則存、舍則亡（2）、畢竟也須是有箇物事。」曰（校3）「操存只是教你收斂（校4）、教你心莫胡思亂量。幾曾捉定有箇物事在那裏（校5）。」又問「顧諱天之明命（3）、畢竟是箇甚麼。」曰（校3）「此只是說要得道理在面前、不被物事遮障了。立則見其參於前、在輿則見其倚於衡（4）、皆只是見得理如此。不成別有箇（校6）物事光爍在那裏。」

※楠本本は本条を卷一一五（一五八九頁）に収める。

（校1）楠本本は「安卿」を「陳安卿」に作る。

（校2）楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「先生前日」を「前日先生」に作る。

（校3）楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

（校4）楠本本・和刻本は「斂」を「歛」に作る。

（校5）正中書局本・朝鮮整版は「那裏」の「那」字を欠く。楠本本は「那裏」を「這裏」に作る。

（校6）楠本本は「箇」の前に「一」が入る。

※卷一一三・16条（二七四二頁）はほぼ同文（記録者は黃義剛）。比較のために以下に掲げる。

安卿問「先生前日與廖子晦書云、道不是有一箇物事閃閃爍爍在那裏，固是如此。但所謂操則存、舍則忘、畢竟也須是有箇物事。」曰「操存只是教你收斂，教那心莫胡思亂想。幾曾捉定有一箇物事在裏。」又問「顧諟天之明命，畢竟是箇甚麼。」曰「只是說見得道理在面前，不被物事遮障了。立則見其參於前，在輿則見其倚於衡，皆是見得理如此。不成是有塊物事光輝輝在那裏。」

（1）先生前日與廖子晦書云、『文集』卷四五「答廖子晦」第十八書（二一九九頁）「蓋詳來喻、正謂日用之間別有一物光輝閃爍、動蕩流轉、是即所謂無極之真、所謂谷神不死。二語皆來書所引、所謂無位真人、此釋氏語、正谷神之曾長也。學者合下便要識得此物、而後將心想象照管、要得常在目前、乃爲根本功夫」。

- (2) 操則存、舍則亡 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與」。
- (3) 顧諟天之明命 『尚書』商書・太甲。『大學』(章句伝一章)に引く。
- (4) 立則見其參於前、在輿則見其倚於衡 『論語』衛靈公。

(53)～(57)条担当 原信太郎

## 【一一七・58】

漳州の陳淳は質問がうまい。よい答えが導き出されるような疑問の持ち方しかしなかつた。

〔葉賀孫〕

漳州 (1) 陳淳會問 (2) 方有可答、方是疑。 〔賀孫 (校1)〕

※楠本本は本条を卷一一五(一五八九頁)に収める。

(校1) 楠本本は「賀孫」の小字注を欠く。

(1) 漳州 現在の福建省漳州。

(2) 會問 質問がうまい、適切な質問ができる。卷四一・47条(一〇五四頁)「人須會問始得。聖門顏子也是會問」。陳淳が質問上手と称されていたことについては、田中謙二「朱門弟子師事年攷」(『田中謙二著作集』第三卷所収)の陳淳の項に、陳宓の墓誌に「或士友疑問不合夫子意、獨稱安卿爲善問」と

記されている」と挙げて言及されている。

## 【一七・59】

(葉) 賀孫 「最近、安卿（陳淳）から便りはありましたか。」

朱子「王子合（王遇）が安卿と問答のやりとりをしていて、それを書き写して私に寄越すのを嫌がつてゐるようで、漳州の朋友たちからは全く質問が来なくなつてしまつた。」

そこでおつしやつた。

朱子「子合は進歩しない。学校でも学生たちに実録（皇帝一代の年表）などを課しているように、物事の軽重が全く分かつてない。多くの学ぶ者たちは、近頃まつたくなつていていられない。」

賀孫「これも（孟子に所謂）「世衰え、道微かずか」になつたということでしょうか。誰もが自分でしつかり立つことができず、官職に就くとすぐにつまずき倒れてしまひます。」

朱子「仕官も科挙も、どれも人をだめにする。」

ある人「ここで立派なことを言つっていても、いざ実践となるとあのざまです。」

朱子「そもそもきちんと言葉にできる者がいないからだ。きちんとと言葉にできてこそ、十分に知ることができるのだ。もし十分に知ることができれば、頭のてっぺんからつま先までり減らすようなどんな苦労があつても、信念を搖るがすことはないだろう。」

そこで関連しておつしやつた。

朱子「器之（陳埴）が先日いくつかの質問を書いて寄越したので、すでに返事を出した。今また何か言つてきただが、やはりまだ明確に理解していないようだ。「仁」を説明するための「公」とはいえ、「公」は「仁」と同列に扱うこととはできない。「公」であれば「私」が無く、「私」が無ければ「仁」がすぐさまあふれ出して行き渡るということだ。程先生（程頤）は「公だけが仁に近い」と言われたが、この「近い」とは、近似の意味ではなく、少しでも「公」であれば「仁」はもうすぐそこにある、だから「近い」という意味だ。（『大学』の）「先後する所を知れば則ち道に近し」というのも同じで、「道」は「先後」（物事の軽重・優先順位）を理解することにこそあるという意味ではなく、ただ「先後」を知りさえすれば「道」に近づけるという意味なのだ。たとえば、塞いでいるものを取り除けば、水は自然と流れて行き渡る。水が流れ行き渡るのは、塞いでいる物を取り除くことで得られた性質ではない。水は元来そういう性質なのであって、それがただ塞がれていただけのこと、塞いでいるものを取り除きさえすれば、すぐさま流れて行き渡るのだ。「仁」も元來誰にでもあるものなのだが、ただ「私」の心によつて塞がれているだけなのだ。利己的な「私」を克服できれば、その振る舞いは自ずから「仁」となる。」

賀孫「「公」は「仁」の実体であり、「仁」は理ということですね。」

朱子「そういうふうに言う必要はない。徒らに混乱するだけだ。「私」を無くすことこそが重要なのであつて、「私」を無くせば、理が覆い隠されたりする」とはないのだ。最近の人ときたら、喜びも「私」の喜び、怒りも「私」の怒り、哀しみも「私」の哀しみ、懼れも「私」の懼れ、愛するのも「私」の心で愛し、悪むのも「私」の心で悪み、欲するのも「私」の心で欲している。もし利己的な「私」を克服して、広々と大

いなる「公」が実現できれば、喜ぶのは「公」の喜び、怒りは「公」の怒り、哀懼愛悪欲、すべて「公」でないものはなくなる。「（公）か「私」か」ここが事を分ける肝要のところだ。顔子が孔子に授けられたのも「己に克ちて礼に復るを仁と為す」という教えだけだった。読書において最も忌むべきことは、自分の考えでもつて解釈しようとし、自分の考えに合わせようとして、その本来の主旨を見失つていてことに気づかないことだ。まずは書いてあることに即して解釈し、明確にすること、もし意味の通じない箇所があれば、そこで初めて自分の考えを持ち出して考えてみるのだ。」「葉賀孫」

賀孫問「安卿（校1）近得書否。」曰「縁王子合與他答問、譚他寫將來、以此漳州朋友都無問難來。」因說「子合（校2）無長進、在學中（校3）將實錄課諸生、全不識輕重先後。許多學者、近來覺得都不濟事。」賀孫云「也是世衰道微（1）、人不能自立、纔做官便顛沛（2）。」曰「如做官科舉、皆害事。」或曰「若在此說得甚好、做却如此。」曰「只緣無人說得好。說得好、乃是知得到。若知得到、雖摩頂至足（3）、也只是變他不得。」因言「器之昨寫來問幾條、已答去（4）。今再說來、亦未分曉。公之爲仁、公不可與仁比並看。公只是無私、纔無私、這仁便流行。程先生云、唯公爲近之（5）、却不是近似之近。纔公、仁便在此、故云近。猶云、知所先後、則近道矣（6）、不是道在先後上、只知先後、便近於道。如去其壅塞、則水自流通。水之流通、却不是去壅塞底物事做出來。水自是元有、只被塞了、纔除了塞便流。仁自是（校4）元有、只被私意隔了（校5）、纔克去己私、做底便是仁。」賀孫云「公是仁之體、仁是理。」曰「不用恁地說、徒然不分曉。只要（校6）是無私、無私則理無或蔽。今人喜也是私喜、怒也是私怒、哀也是私哀、懼也是私懼、

愛也是私愛、惡也是私惡、欲也是私欲。苟能克去己私、擴（校7）然大公、則喜是公喜、怒是公怒、哀懼愛惡欲、莫非公矣。此處煞係利害（7）。顏子所授（校8）於夫子、只是克己復禮爲仁（8）。讀書最忌以己見去說、但欲合己見、不知非本來旨意。須是且就他頭（校9）說、說教分明。有不通處、却以己意較量。」

〔賀孫〕

※楠本本は本条を巻一一五（一五八九頁）に収める。

（校1）楠本本は「安卿」を「陳安卿」に作る。

（校2）楠本本は「子合」を「王子合」に作る。

（校3）楠本本は「將」の前に「却」字が入る。

（校4）楠本本は「自是」を「亦自是」に作る。

（校5）楠本本は「了」字を欠く。

（校6）楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「要」を「公」に作る。

（校7）楠本本・正中書局本は「擴」を「廣」に作る。

（校8）朝鮮整版は「授」を「受」に作る。

（校9）楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「頭」字を欠く。

（1）世衰道微　『孟子』滕文公下「世衰道微、邪說暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之、孔子憚、作春秋」。

(2) 頽沛 『論語』里仁「君子無終食之間違仁、造次必於是、顽沛必於是」。

(3) 摩頂至足 頭の先から足の踵まで、全身を磨り減らすほどの困難。『孟子』尽心上「墨子兼愛。摩頂放踵利天下、爲之」。

(4) 器之昨寫來問幾條、已答去 「器之」は陳埴。「仁」と「公」の関係を論じた陳埴との問答は、以下の『文集』卷五八・答陳器之第一書に見える。ここでも朱熹は、程頤の言を引用した上で、水と障害物の喻えを用いて「公」の性質を説いている。

「所示四條、第一、第三兩條得之。但以公爲仁、似未精。伊川先生明言、仁道難言、惟公近之、非以公便爲仁。又云、公而以人體之、故爲仁。竊詳此意、公之爲仁、猶言去其壅塞則水自通流、然便謂無壅塞者爲水、則不可。更以此意推之、可見仁字下落也。又中之爲義、固非專爲剛柔相半之謂。然當剛則剛、當柔則柔、當剛柔相半則相半、亦皆自有中也。試更思之、如何。」

(5) 程先生云、唯公爲近之 『遺書』卷三・59条(六三頁)「仁道難名、惟公近之、非以公便爲仁」、同卷十五・84条(一五三頁)「仁之道、要之只消道一公字。公只是仁之理、不可將公便喚做仁。」「一本有將字。」公而以人體之、故爲仁。只爲公、則物我兼照、故仁、所以能恕、所以能愛。恕則仁之施、愛則仁之用也。」

(6) 知所先後、則近道矣 『大學』(章句經一章)「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。」

(7) 係利害 利か害かの分かれ目に關わる、重要な分歧点になる。『文集』卷十八「仲友造置浮橋」「若一兩政循襲、必不肯廢。此大係利害」、同卷二七「與周丞相書(七月十二日)」「且又別有一事、尤

係利害」。

(8) 克己復禮爲仁 『論語』顏淵「顏淵問仁、子曰、克己復禮爲仁」。

(58～59条担当 江波戸亘)

## 卷一一八 朱子十五 訓門人六

### 【一一八・1】

先生が私（童伯羽）に、どのように修養に励んでいるかを訊ねられた。

伯羽「今のところ静坐を学んで、思慮を徹底的に抑えようとしています。」

朱子「徹底的に抑えるというのはやはりよくない。（静坐は、日常の喧噪から）一步退けばそれでよいのだ。ひたすら目を閉じて座つていれば、むしろ思慮が生じてしまおう。」

朱子「全く思慮がないというのもいけない。よこしまな思慮を無くすだけだ。」「以下、童伯羽への訓戒。」

先生問伯羽、如何用功。曰「且學靜坐、痛抑思慮。」曰「痛抑也不（校1）得、只是放退（1）可也。若

全閉眼而坐、却有思慮矣。」又言「也不可全無思慮、無邪思耳（2）。」〔以下訓伯羽。〕

（校1）楠本本は「不」を右傍に小字で書き加えている。

（1）放退 身を引く、職を退く、煩瑣な現実から一步退く。卷四五・70条（一一六六頁）「遜志、是卑遜其志、放退一著、寛廣以求之、不忒恁地迫窄、便要一想思而必得」、卷二三五・19条（三二二二頁）「問子房孔明人品。……後來事業則都是黃老了、凡事放退一步」。

（2）不可全無思慮、無邪思耳 卷三四・31条（八六一頁）「心本是箇動物、怎教它不動。夜之夢、猶寤之思也。思亦是心之動處、但無邪思、可矣」。

## 【一一八・2】

学ぶ者には「博く学ぶ」「審らかに問う」「慎んで思う」「明かに弁ず」など、なすべき事柄が多くある。

しかし、初学の者はまずは雑多な思慮をきれいさっぱり片付けて、基礎を作つてこそ、着手することが可能となる。ちょうど家を建てるのに、基礎部分があつてこそ多くの梁柱を立てることができるようなんだ。

學者博學審問慎（校1）思明辨（1）等、多有事在。然初學且須先打疊（2）去雜思慮、作得基址、方可下手。如起屋須有基址、許（校2）多梁柱方有頓處。

(校1) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「慎」を「謹」に作る。

(校2) 楠本本は「許」を「計」に作る。

(1) 博學審問慎思明辨 『中庸』(章句二〇章)「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。」

(2) 打疊 片付ける、始末する。以下の4条・5条にも見える。

### 【一八・3】

書物を読むときは、心をゆつたりと広くして素直に読むべきであり、先に全体的な道理を理解した上で、各部分を詳細に研究するのだ。君の場合、たとえるならば大きな建物に入ろうとしてちょうど一つの門の外にいて、その門の内側に何重もの門があるのに入るることも見ることもせずに、その建物内部の事を述べようとしているようなもの、どうしてそんなことができようか。

觀書須寬心平易看、先見得大綱道理了、然後詳究節目。公今如人入大屋（1）、方在一重門外、裏面更有數重門未入未見、便要說他房裏事、如何得。

(1) 如人入大屋 朱熹はしばしば読書を建物を見ることに喻えている。卷十・83条（一七三頁）「讀書

者譬如觀此屋、若在外面見有此屋、便謂見了、即無緣識得。須是人去裏面、逐一看過、是幾多間架、幾多窗櫺。看了一遍、又重重看過、一齊記得、方是」。

### 【一八・4】

君はだいたい顔つきも言葉もすべて性急で、せせせせしている。すつきりさせて、心の中をいきいきとさせなければならない。まるで一把のもつれた糸がからまつて定まらないのを見て、あわてて解こうとし、ますますこんがらがらてしまつてゐるようなものだ。

公大抵容貌語言皆急迫（1）、須打疊了、令心下快活。如一把棼絲、見自棼而（校1）未定。才急下手去拏、愈亂。

（校1）楠本本は「而」を右傍に小字で書き加えている。

（1）急迫 憄ただしい、せつかち、焦つてゐる。とりわけ修養上で性急に結果を得ようと焦る者に対して、その警告として述べられることが多い。卷十八・<sup>113</sup>11条（四一九頁）「殊不知致知之道不如此急迫、須是寬其程限、大其度量、久久自然通貫」、卷三二・10条（八〇六頁）「聖人之言寬緩、不急迫」、卷三五・98条（九三〇頁）「程子說弘字曰寬廣、最說得好。毅是儘耐得、工夫不急迫。如做一件、今日做未

得、又且耐明日做」。

### 【一八・5】

人は心の中のどうでもよい思慮をすつきり片付けてしまわねばならない。心中が紛擾していては、道理を求めて得られたとしても、その落ち着けどころがない。心中をすつきりと片付けてこそ、一つのことは一つのこととして、二つのことは二つのこととして見ることができるようになるのだ。

人須打疊了心下閑思雜慮。如心中紛擾、雖求得道理、也沒頓處。須打疊了後、得一件方是一件、兩件方是兩件。

### 【一八・6】

君は書物を詳細に読んではいるが、せっかちで大変慌ただしく、すっかり混乱してしまっている。その上、無理にうがつて道理を求め、心を平らかに氣をやわらげて読むことができていない。当面はしつかりと見定めて、味わいながらゆつたり読むようにしてみなさい。

公看文字子細、却是急性（校1）、太忙迫、都亂了。又是硬鑽鑿求道理、不能平心易氣看。且用認得定、用玩味寬看。

（校1）正中書局本・朝鮮整版は「急性」を「性急」に作る。

## 【一八・7】

童伯羽「書物を読むのに順番はあるのでしょうか。余正叔（大雅）は、読めないものを（順序をまちがつて）読めば読み誤ると言っています。」

朱子『論語』の中の一章が短いものは確かに読めない。下手に読もうとすると後ろの章を読み誤つてしまいやすい。『孟子』や『詩經』『書經』などは、通して読まなければいけない。というのも、それらは首尾一貫して前後で相応じあつてるので、全部を読まなければ文脈がわからないからだ。」

童伯羽「私も常常確かに読み誤りやすいものだと感じておりました。ひたすら読んでいると、無理やり穿鑿する弊害に陥りやすいと思うのですが、いかがでしょうか。」

朱子「穿鑿するのはいけない。書物は一步先へ進んで読むのではなく、一步後ろに退いて読むべきなのだ。たとえば眼で物を見るのに、全体として正しいかどうか、曲がつていなかどうかは、離れたところから見てこそ確認できるのであり、近くから見ていてはますます視野が狭くなつて見えない。」

朱子「だいたい、やることが多くて読書ができないとか、能力が人に及ばないなどと言う人はみな、自分の志を自ら責めることをしていないだけだ。志を見失わなければ、誰がやることが多いとか能力が低いなどということを問題にしようか。やることが多いとか、能力が低いとか言う、その言葉にはそれほど大した問題があるようには見えないかもしれない。しかし、そういうた発言にこそ、志の無さや自暴自棄に甘んじていることは見て取れるのだ。これ以上の問題はあるまい。本当に努力をしている人は、自然とそういうことは言わないものだ。」

問「讀書莫有次序否。余正叔云、不可讀、讀則蹉過了（1）。」曰「論語章短者誠不可讀、讀則易蹉過後章去。若孟子詩書等、非（校1）讀不可（2）。蓋它首尾自相應、全籍（校2）讀、方見。」問「伯羽嘗覺固易蹉了。專看、則又易入於硬鑽之弊、如何。」曰「是不可鑽。書不可進前一步看、只有退看。譬如以眼看物、欲得其大體邪正曲直、須是遠看方定、若近看愈狹了、不看見。」「凡人謂以多事廢讀書、或曰氣質不如人者、皆是不責志（3）而已。若有志時、那問他事多、那問他氣質不美。」曰（4）事多、質不美者、此言雖若未是太過、然即（校3）此可見其無志、甘於自暴自棄、過執大焉。真箇做工夫人、便自不說此話。」

（校1）楠本本は「非」を右傍に小字で書き加えている。

（校2）楠本本、正中書局本、朝鮮整版、和刻本は「籍」を「藉」に作る。

（校3）和刻本は「即」を「耶」に作る。

(1) 余正叔云、不可讀、讀則蹉過了。余正叔（大雅）はかつて読書を偏重していたが、朱熹の注意を受けてから静坐を習うようになり、かえつて読書を厭うようになったという逸話がある。卷一一三・41条

(二七五二) 参照。

(2) 論語章短者誠不可讀（若孟子詩書等、非讀不可）。『論語』と『孟子』では読み方が異なると朱熹は述べる。『孟子』は「熟讀」を要し、『論語』は思索を費やす（卷十九・27条。四三二頁）とも、また『論語』は冷静に理解する」と（「冷看」）を要し、『孟子』は「熟讀」を要するとも述べる（同・28条）。

四三二頁）。

(3) 責志　『遺書』卷十五・96条（一五五頁）「學者爲氣所勝、習所奪、只可責志」。

(4) 曰（底本では「曰」の前までを一つの発言とし、「曰」以下を別の発言として扱っているが、文脈から前後一連の発言として解釈した）。

（1～7条担当　宮下 和大）

## 【一一八・8】

董卿（童伯羽）「致知（知を十分發揮する）」の後に、「持養（心を保持して養うこと）」して、それではじめて「力行（努めて実行すること）」ができるのでしょうか。」

朱子「それでは、今日は「致知」、明日は「持養」、後日に「力行」ということになってしまふ。「持養」

は「行」に他ならない。〔致知〕の先の）「正心」「誠意」もどうして「行」でないことがあらうか。ただ、「行」には優先順位があるので、〔正心〕「誠意」の先の）「治國」「平天下」は遠大な「行」というに過ぎない。」

〔鄭可學〕

蜚卿問「致知（1）後、須持養（校1）、方力行（2）。」曰「如是、則今日致知、明日持養、後日力行。只持養便是行。正心、誠意、豈不是行。但行有遠近、治國平天下則行之遠耳。」

〔可學〕

（校1）正中書局本は「持養」を「待養」に作る。

（1）致知 下文の「正心」「誠意」「治國」「平天下」とともに、『大學』八条目。

（2）致知後、須持養、方力行 卷一一五・11条（二七七一頁）にも同様の項目の先後をめぐる楊道夫との問答が見える。

## 【一一八・9】

蜚卿（董伯羽）「私の「主」」（集中力）はいかがでしようか。」

朱子「それは自分で考えるべきこと、たとえばご飯を食べるのに、どうして他人に自分が空腹かどうかを尋ねることができるようか。」

蜚卿「何事もない時には、考へる」ともないのでしょうか。」

朱子「何事もない時は何事もないのであつて、それ以上何を考へるというのか。とは言え、人には何事も無い時は少なく、何がある時が多い。少しでも考へたなら、それはもう何事もない時ではなくなつてしまふ。」

蜚卿「静の場面では、思慮が紛擾することが多いのですが。」

朱子「それこそ「主」でないからだ。人の心にはこの欠点がある。とりあえずは読書の課程に心を縛り付けた方がよい。課程に沿つて順々と読み進めていけば、一段落ついたところで自ずと効果の程が見えるだろう。そもそも、理というものは人の心の中にあるものであつて、外にあるのではない。ただ、どうでもいいような名利に心身をすり減らしているために、人の心が本来もつているものが日々くらまされてしまつているだけのことだ。残念なことではないか。」　　〔楊道夫〕

蜚卿問「不知某之主一如何。」曰「凡人須自知、如己喫飯、豈可問他人飢飽。」又問「或於無事時、更有思量否。」曰「無事時只是無事、更思箇甚。然人無事時少、有事時多、才思便是有事。」蜚卿曰「靜時多爲思慮紛擾。」曰「此只爲不主、人心皆有此病。不如且將讀書程課繫縛此心、逐旋行去、到節目處自見功效淺深。大凡理只在人心（校1）中、不在外面。只爲人役役於不可必之利名、故本原固有者、日加昏蔽、豈不可惜。」　　〔道夫〕

（校1）朝鮮整版・正中書局本は、「人心」を「人身」を作る。

【一一八・10】

蜚卿（童伯羽）が仁に関する諸説を集めて分類しようとしていた。

朱子「そんなことをする必要はない。一つの所が理解できたならば、他の所も自然と竹を裂くように理解できるだろう。」　〔楊道夫〕

蜚卿欲類仁説看。曰「不必錄。只識得一處、他處自然如破竹矣。」　〔道夫〕

【一一八・11】

先生が蜚卿（童伯羽）に向かつておっしゃつた。

朱子「君の質問を聞いてみると、まだ『論語』を仔細には読んでいないようだ。読書というものは、意味をすつきり理解できるようにしなければならないのであって、ただ計画を追いかけて読めばよいというものではない。ある事柄が分からなければ、しばらくその事について考え、すつきりさせなくてはならない。最初疑問に思つたところも、ひたすら考えていけば、自ずとすつきり理解できるはずだ。もしそな疑問を書き記しておくだけで、気にしなくなつてしまつたならば、心に得るものは何もない。私などはもしすつきり理

解できないことがあれば、自ずと心からその問題が離れなくなつて、朝に晩に日々その事が気になつて仕方ない。」　「葉賀孫」

先生謂蜚卿（校1）「看公所疑，是看論語未子細。這讀書，是要得義理通，不是要做趕課程模樣（1）。若一項未通、且就上思索教通透，方得。初問疑處，只管看來，自會通解。若便寫在策上，心下便放却、於心下便無所得。某若有未通解處，自放心不得，朝朝日日，只覺有一事在這裏。」　「賀孫」

（校1）正中書局本は「蜚卿」を「飛卿」に作る。

（1）不是要做趕課程模樣　卷二〇・55条（四五六頁）「大抵聖賢言語、不須作課程。但平心定氣熟看、將來自有得處」。

## 【一一八・12】

蜚卿（童伯羽）が書面をお渡しして先生に謁見し、科挙を放棄することを報告した。

朱子「當世の士大夫は科挙を受けて俸禄を求め、父母につかえ、妻子を養うための生計としているが、それも仕方のないことだ。君は生計の方はどうなんだ。」

蜚卿「どうにか生活していく程度です。」

朱子「それならば、よくよく考えてみることだ。」

〔楊道夫〕

蜚卿以書謁先生、有棄科舉之說。先生曰「今之士大夫應舉干祿、以爲仰事俯育（1）之計、亦不能免。公生事如何。」曰「粗可伏臘（2）。」曰「更須自酌量。」〔道夫〕

（1）仰事俯育 『孟子』梁惠王上「是故明君制民之產、必使仰足以事父母、俯足以畜妻子、樂歲終身飽、凶年免於死亡」。卷十三・152條（二四六頁）「科舉累人不淺、人多爲此所奪。但有父母在、仰事俯育、不得不資於此、故不可不勉爾。其實甚奪人志。」

（2）伏臘 生活に必要な物資。蘇舜欽「答韓持國書」「此雖與兄弟親戚相遠、而伏臘稍充足、居室稍寬」。

## 【一一八・13】

蜚卿（童伯羽）「私は、科挙を棄てるべきかどうか先生にご相談申し上げたいと思つております。どうか明確なご判断をお教え下さい。」

朱子「それは君自身がどう考えるかにかかるつていることだ。父母につかえ、妻子を養うことができるかどうか、よく考えてみなさい。また科挙用の作文をして他人と競うことに、自分にとつて意味のある道理があるかどうかも、よく考えてみなさい。自分の空腹満腹や暑い寒いなどは、自分で知ることであつて、他人が

どうしてとやかく言えようか。」 「楊道夫」

蜚卿曰「某欲謀於先生、屏棄科舉、望斷以一言。」曰「此事在公自看如何、須是度自家可以仰事俯育。作文字比之他人有可得之理否、亦須自思之。如人飢飽寒煖、須自知之、他人如何說得。」 「道夫」

## 一一八・14

蜚卿（童伯羽）「私は心が落ち着かないで、科舉をやめることにいたしました。」

朱子「思い切れたのかね。」

蜚卿「思い切りたいと思っております。」

朱子「『切りたい』などと言つてはだめだ。『したい』などという言い方をなくさなければならぬ。（科舉を受けるか否かの）道理を理解しようとするならば、焦つてもいけないし、怠けてもいけない。」 「楊驥」

蜚卿云「某正爲心不定、不事科舉。」曰「放得下（1）否。」曰「欲放下。」曰「才說欲字、便不得、須除去欲字。若要理會道理、忙又不得、亦不得懶。」 「驥（校1）」

(校1) 楠本本は、「驥」の小字注を欠く。

(1) 放得下 放つて置いて気にしない、こだわりや執着をする。卷一一七・13条(二八一〇頁)「問、尋常於存養時、若擡起心、則急迫而難久。才放下、則又散緩而不收。不知如何用工方可。曰、只是君元不會放得下也」。

(8~14条担当 松野敏之)